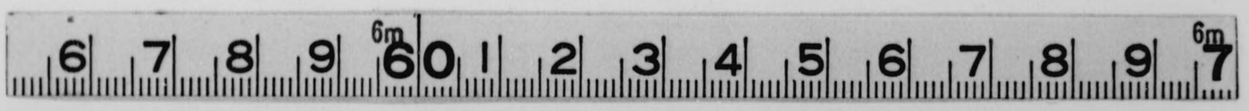
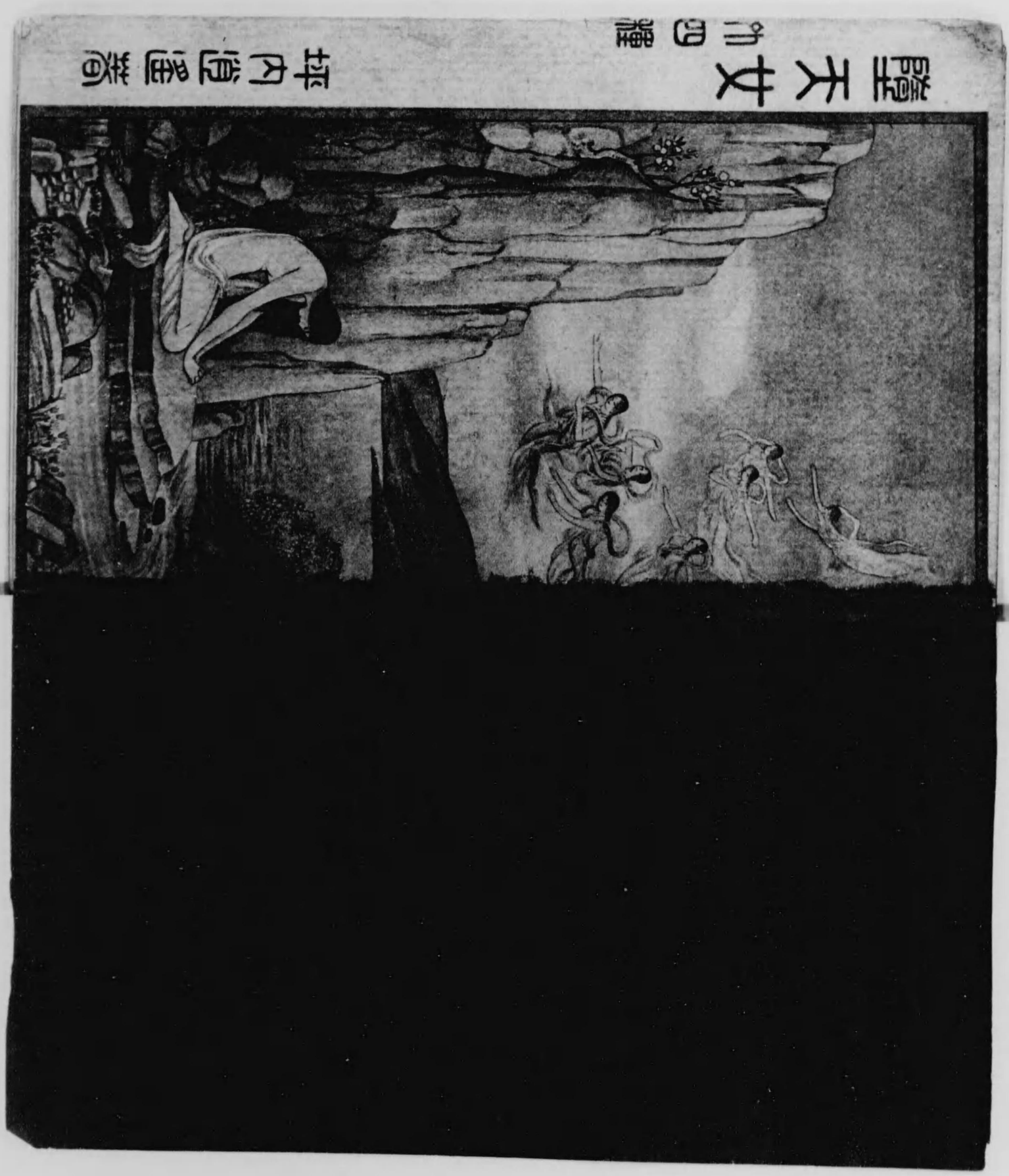
357
59



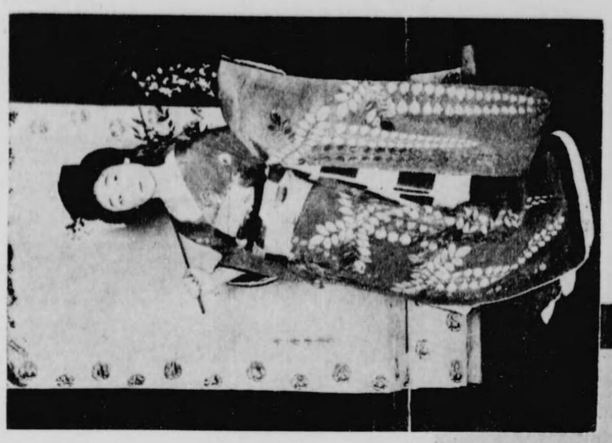

湖北本
白鹿
洗心亭刊行

357-59
357
59

女訓四種

坪内逍遥著

大正
4. 6. 22
購求



墮天女其他四種

目次

墮天女に就て……一頁
墮天女……一三
第一場……一三
第二場……二七
歌劇の輸入……四九
舞踊の劇……五四
明治の舞踊劇……五八
新舞踊劇の試演に就きて……七〇

寒山拾得……九三
お七吉三……九八
浮世繪と我舞踊劇……一〇四
音樂と其背景……一一五
舞臺上の色彩と舞踊劇……一二一
歌麿と北齋……一二九
其一、イントロダクションの幕……一三九
其二、藤娘……一六六
其三、鐘馗……一七〇
和歌之浦……一八〇

墮天女其他四種

「墮天女」に就きて

「墮ちたる天女」は今から十年前の私の空想の遺物である。「新樂劇論」を著した當時、私は種々の空想を抱いてゐた。日本在來の舞踊を本位に立てるといふことが眼目ではあつたが、出來るものならば行々(ゆくゆく)は外國音樂をも利用し、日本特有の歌劇(オペラ)をも創始したいと望んだ。そこで試驗の手段として、全く樣式を異にした三種の樂劇

を、ともかくも標本として作らうと思つた。其の一が在來の所作事を本體とした「新曲浦島」であり、其二は能樂の骨法を學んだ「新曲かぐや姫」であつた。つゞいて第三の標本として、外國歌劇の組織を學びつゝも同時に我舞踊を利用する點に於ては日本の特色を發揮すべき新式のオペラをと考へて、三段曲の歌劇を立案し、其中の第一曲だけは「浦島」と同時に作しようとしたのであつたが、前の二種すらも思ふやうに實現されさうにないのに氣を腐らせ、二つには第二段と第三段とが思ふやうに纒まらぬので最初の熱心が衰へ、感興も薄らぎ、あらまし纒めた腹案も殆ど忘れてしまふ程になつた。外題は最初は「新曲比治山の羽衣」と附ける積りであつた。

第一幕だけ出來て、第二、第三の纒まらなかつた主な原因は日

本在來の舞踊を加味しようとしたからであつた。今になつて考へれば、是れは無理な注文である。三十年、四十年の後なら知らず、日本オペラの卵さへもまだ生れぬ時代に、オペラと所作事を綯交にしようと望むのは二階だけを煉瓦造りにして、それを檜の角柱で支へようとするやうなものである。それに三幕目が兎角陳套に墮しさうなので厭氣がさし、かた〳〵中止してしまつた。

「比治山の羽衣」は白鳥傳說中では最も演劇的といへる。日本に於ける羽衣傳說は三保の松原のを最も人口に膾炙したものとすると、尙他に三種程ある。丹後比治山(或は比沼山)、近江の與胡の湖、河內の天の川のそれである。三保の羽衣は謠曲で名高く、知らぬ者もなく、又其翻案や敷衍が小說、演劇、歌曲、其他いろ〳〵のも

のに用ひられてゐるが、不思議にも他の三者は文士にも藝術家にも閑却されてゐる。比治山の傳說を文學化したのは、恐らく井上巽軒博士の新體詩「比沼山の歌」が最初ではないかと思ふ。薄田泣菫氏の、今書名を忘れたが、單行本の新體詩中の一節に、挿繪が添つて、およそ三四ページばかり同じ傳說が歌はれてあつたと記憶する。同氏は七人の天女を、たしか基督敎の七德の象徵として寫し出してゐた。其他には想ひ出せない。與胡の湖と天の川の羽衣に至つては、文學上、藝術上の作品としては、未だ曾て見聞したことが無いやうに思ふ。讀者中にはまだ讀まぬ人があるかも知れぬから、「古風土記逸文」に據つて、原文のまゝを拔抄しよう。

丹後國風土記云、丹後國丹波郡郡家、西北隅方有比治里、此里比治

山頂有井、其名云眞井、今既成沼、此井天女八人降來浴水、于時有老夫婦、其名曰和奈佐老夫、和奈佐老婦、此老等至此井、而竊取藏天女一人衣裳、卽有衣裳者皆天飛上、但無衣裳女娘一人留、卽身隱水而獨愧居、爰老夫謂天女曰、吾請天女娘汝爲兒、天女答曰、妾獨留人間、何敢不從、請許衣裳、老夫曰、天女娘何存欺心、天女云、凡天人之志、以信爲本、何多疑心、不許衣裳、老夫答曰、多疑無信、率土之常、故以此心爲不許耳、遂許卽相副而往宅、卽相住十餘歲、爰天女善爲釀酒、飲一盃吉萬病悉除之、其一杯之直財積車送之、于時其家豐土形富、故云土形里、比自中間至于今時便云比沼里、後夫婦等謂天女曰、汝非吾兒、暫借住耳、宜早出去、於是天女仰天哭慟、俯地哀吟、卽謂老夫等曰、妾非以私意來、老夫等所願、何發厭惡之心、忽存出去之痛、老夫增發

嘆願去、天女流涙、微退門外、謂郷人曰、久沈人間、不得還天、復無親故、不知由所居、吾何哉何哉、拭涙嗟嘆、仰天歌曰阿麻能波良、布理佐兼美禮婆、加須美多智、伊弊治麻土比天、由久弊志良受母、遂退去而至荒鹽村、卽謂村人等云、思老夫老婦之意、我心無異、荒鹽者、仍云比沼里、荒鹽村、亦至丹波里哭木村、據槻木而哭、故云哭木村、復至竹野郡船木里奈具村、卽謂村人等云、此處我心成奈具志久、乃留居此村、斯所謂竹野郡奈具社座豊宇賀能賣命也

近江與胡の傳說は伊香の小江の古名で傳へられてゐるのが本傳である。本傳も傳說も吉田博士の「地名辭書」に詳しいから省く。天の川のも同書に見えてゐる。前者では伊香刀美と呼ぶ男が、八天女の浦輪に水浴せるを見て其一人の羽衣を奪ひ、遂に其天女を妻

にし、二男二女を生ませたが、後其天女が羽衣を搜しいだして、それを著て昇天し去つたといふことを筋としてゐる。天の川のも同脈の話、たゞし三保の松原のと同じく、天女は八人ではなく、只一人になつてゐる。

以上四傳說のうち、比治山のみが結婚問題、戀愛問題に無關係であるのみか、末が悲劇になつてゐる所が其特色である。山嶺の泉といふ所などは詩的でもあり神秘的でもあるが、相手が老夫老婦で、しかも結末が行倒れ同樣の最期といふのであつては、昔の作者には氣に入らなかつたでもあらう。殊に謠曲の羽衣が其抒情的な、詩的な風韵で洽く賣込んでしまつた後なので、誰も先づ此耳遠い傳說には手を着けることを躊躇したでもあらう。

「浦島」を作した當時、いろ〳〵の理由で、私は此傳説を最も自分の目的に叶つてゐるものと思つた。西川、歌川の浮世繪といふ心持で、振事本位の「浦島」を作り、狩野、土佐も採幽よりは新しからずといふ見當で謠曲本位の「かぐや姫」を作つた次には、是非とも日本式油繪といふ心持で一作を試みようと考へてゐたので、それで此傳説を採用したのである。といふのは、オペラが立派に日本に成立つてしまつた將來はいざ知らず、作曲者らしい作曲者の存在しない現在の日本に在つては、最初の試みとしてのオペラは必然の結果として外國臭味を帶ぶに相違ない。さすれば作中の人物が、在來の劇や小説等で見慣れ聞き慣れて種々の聯想や背景を齎し來るやうなものであつた時分には、そこにおのづから一種の矛盾若

しくは不調和を覺えしめて、假令滑稽とまでは感ぜしめないにもせよ、何となく不自然のやうな、うそらしいやうな、面白からぬ感じを與へるであらうから、最初は先づ及ぶべきだけ聯想離れをしたはうがよい、成るべく在來の演劇などに用ひられてをらぬ材料、服裝其他の風俗も何れかといへば、外國に似寄つてゐた時代、例へば、奈良朝時代、飛鳥時代といふやうな邊に覘を附けたはうがよいと考へた。そこで此「比治山」傳説を選び、第一段を「墮天女」の卷、第二段を「狂伶人」の卷、第三段を「昇天女」の卷と大體の腹案を定めた。併し、第二段以下は今尚あらすぢが立つてゐるばかりで、ほんたうの物にはなつてゐない。近頃では作者の心狀態が變つたので最後の「昇天女」の卷といふのが、どうしても成立ちさうになく

なつた。或は將來此作を書き繼ぐやうなことがあつても、恐らく此卷は傳說通り悲劇に終らしめるのであらうかと豫想する。

さういふ譯だから、此作の眞の旨意と趣向とは三段共に出來てしまはねば、他人には會得して貰はれない次第だが、併し彼の希臘劇が三段曲になつてゐながら、一曲々々で味ふことが出來るやうなもので、「墮ちたる天女」は唯これだけのものと見て下さつてもよい。

私は音樂には殆ど全く不案內である。本場のオペラは勿論觀たことがない。それでゐて作つた臺帳だから、外國オペラを標準にしたら、多分實演しがたいものでもあらう。但し日本式のオペラとしては上場し得らるゝものと自分だけは思つてゐる。

日本式のオペラは特に舞踊をまじふべきだと思ふ。必しも日本式の舞踊卽ち振事を用ひるといふのではない、以前はそんな風にも考へてゐたが、今は其案は棄てた。むしろバレー風の舞踊がよい。彼の能樂の莊重を以てすらも、其實半以上舞踊趣味を生命としてゐるのを思つたなら、所謂樂劇、殊に二場三場と續くやうなのは是非とも之に賴らねばならぬことは解るであらう。立つたり、坐つたり、歩いたりして只かはる〴〵歌ふばかりでは、到底永く感興を持續することはむづかしい。殊に創始時代の拙い獨唱や合唱を長々と聽かされるは、活歷劇やイブセン式に似て非なる拙い演劇を見せられるのと一般の退屈を釀すであらう。舞臺面の波瀾、人物の活動、之に加へて舞踊の利用、これらは最初の試みにも忘

るべからざる要件であらう。幸ひに邦人は舞踊には長じてゐる。我複雑なる舞踊に馴れ、それで鍛ひ上げた技倆からいへば、バレー式の踊り位は何の事も無い。それをいろ〳〵に變形したり適用したりするのは聊かの工夫で出來ることゝ思ふ。要するに小品物は別だが、大物となると、詩と器樂と聲樂と舞踊と科介と表情と背景と服飾との圓滿なる調和が所謂樂劇の本色であると思ふ。或はさうでないかも知れんが、私が「墮ちたる天女」を、試作した動機はそこいらのところである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

墮天女

第一場

一種陰森なる、されど人間離れのしたるため何となく滑稽にも聞かるゝ幻怪なる音樂、最初は遠く微かに、石泉の迸り落つる如く、既にして次第に近く、遂には全く近く、山津波の寄するが如く、舞臺一ぱいに響き渡ると同時に幕開く。

丹後の國丹波郡比治山の中腹、上手は山巓へ通ふ險しき路、處々に巉岩聳え立ち、千年以上を經たりと見ゆる樟、欅、榉、雷火に擊たれて短くなれる喬松など、何れも奇怪なる形に生長び、陰曆五月中旬の新綠のおのづからなる青地の錦を懸く。白き赤き躑躅浮模樣のやうにあちこちに點綴す。下手にも處々奇岩峙ち、怪樹生ひ繁れり。中央の打開いたる部分は、半は深き溪に臨み、半は麓へ通ふ路の心にて、こゝより人物の出入あり。正面の奥には、間近き山々の山巓手に取るやうに見ゆ。十五夜の闌けたる月、奇怪なる形に亂れ渦卷ける黑雲の中に隱れて、四面暗憺たる體。

幕の開きたる時、一群の妖精、人とも獣とも犬とも猫とも名狀しがたき容貌したる半裸體の怪物、身長五尺程を最大とす、小さきは三尺にも足らぬがあり、幕開の幻怪なる音樂につれて狂舞してゐる。やがて舞ひとゞまると、妖精の長らしき巨覽、獨り前へ進みいでゝ唱ふ。他の妖精等も時々これに和して唱ふ。

妖長　あゝ、此山巓に
底知らぬ淵做す清泉
天つ女ら我物とす、
月圓く光る夜毎。
あゝ、銀の清泉！

妖合　あゝ、銀の清泉!!

妖長　あゝ、此山麓に

果知らず波打つ稻穗、
人の子ら我物とす、
年々に殖え蔓延り。
あゝ、金の稻穗！

妖合　あゝ、金の稻穗!!

妖長　空高く、海遠きも、
日出づれば我世狹し。
舞へ、踊れ、夜ぞ今は。
あゝ、たゞ夜ぞ我世！

妖合　あゝ、たゞ夜ぞ我世!!

これに急しき間奏、それにつれて妖群おもひ〳〵に狂ひ廻ること一巡、樂調一變して稍緩く徐かになると、其陰森なる音樂につれて、妖群手をとりあひ、合唱しつゝ、緩く環形に舞ふ。

妖合　高きは低まり、明きは昏め。
甘きは苦みて、清きは濁れ。
微妙きもの皆滅びはてよ。
翼ある人たる天女は墮ちよ。
毛の無き獸類と人をば呪へ、
微妙きもの皆滅びはてよ、

此中遠く山麓の方にて笛の聲聞ゆ。月雲間にあらはる。妖群これを聽きて驚き怖るゝ介。

妖合　聞けよ！　聞けよ！
あの聲！　あの聲！

妖精等あわてゝ上下へ逃入る。
一種悲涼清婉なる笛の音、次第に近く又高く瀏亮として聞え來ると共に、麓の方より一美少年、奈良の帝に仕へたりし年若き伶人、都雅なる服裝して、手に一管の玉笛を携へて登り來る。

少年　あやし、我笛の音に、
雲破れ、月躍りいで、
四邊晝より明し。
げにこそ靈しき此山！

四邊を見廻し

予此地に漂浪うてより、
都にあこがれぬ日なし。
聞く此山のいたゞきに、
永遠の淵なす清泉、
月光明鏡を沈むる夜、
天女あまくだり沐浴す、
其姿知られず見れば、
願ひごと一つは叶ふ、
祟あれど。……

天の一方を望みて物にあこがるゝ思入

あゝ、まだ消えぬ幻影、
なつかしき夢の都！
あこがれて迷ひ登れば、
怪し！　月隱れ、　行手は闇。
是非なく岩に座し吹く笛の音に
ふしぎや月出でゝ四邊見ゆる。

上手の方を仰ぎ見て

あれこそ目ざす嶺よ！　登り行かん。

少年玉笛を吹き鳴らしつゝ、徐かに上手の路を辿りて、山嶺の方へ登り行く。笛の音次第

に遠くなる。

以前の幻怪なる音樂又聞えて、妖精群あちこちより走り出で、或は二頭、或は三頭、寄りこぞり、上手の方を指ざして相語る介。

妖合　人なれど彼の物の音。
神に近し、近寄られず。
待て機を。しばらく待て。

妖長　又も、又も！
人こそ、人こそ！

これにて妖精どもあわてゝ上下の木陰へ逃入る。

野趣を帶びて卒直なる、されど殆ど無規律かと思ふほど放縱なる音樂、次第に近く聞え來る

と共に、農家の青年らしき、されど顏の色は寧ろ蒼白く、逞しき骨格には似ず身心共に疲れ弱りたりと見ゆる男、人目を憚るが如く左右前後を見返りながら麓より登り來る。

青年　あら嬉し！　人に知られず
今宵こそ登り來れり。
頑固の父を出しぬき。……
あゝ！　父か？　あらず。　仇敵！
貪慾に凍る心！
いぢわるく我戀妨ぐ。……
あゝ、戀よ！　命の美酒！
戀なうて何に生くる我？……

天女見ば其戀叫ふ。
行きて見ばや疾く天女を。

偶と麓の方を見て驚く介。

あら悲し！　父こそ來つれ。
何とせん？　目にかゝらば
天女を見るも效なし。

以前の幻怪なる音樂又聞えて、妖群あちこちより躍り出で、青年の背後を跳れ廻りながら合唱す。

あゝ、わが戀のさまたげ！

妖合　げに〳〵戀のさまたげ！

青年　うらめし！　こよひもまた
いぢわるく我戀妨ぐ。
あゝ！　父か？　あらず。仇敵！

妖合　げに〳〵、父にあらず、仇敵！

青年煩悶する思入。

青年　何とせん？　目にかゝらば
天女を見るも效なし。……
あゝ、わが戀のさまたげ！

妖群周圍を跳廻りて

妖合　げに〳〵、戀のさまたげ！

青年　人はあらず……そと殺さば……

（青年前後左右を見廻すことありて）

妖合　人はあらず、そと殺せや!!

（妖群狂舞して）

（同じ曲を二三回折返す。樂調殺氣を帶ぶ。青年殺意を抱いて木蔭へ忍ぶ。妖群も上下に別れて隱る。野趣を帶びたる、されど何となく突兀として戰きがちになる樂調、次第に近く聞え來る。既にして農家の主翁らしき一老翁、麓より人を求むる樣にて登り來る。）

老翁　まさしく我子！……

教誨曾て聽かず、

日ごろ放蕩つくす上に、

今宵先へ廻り、

親の願望さまたぐ。

おのれ恩知らずめ！……

何とせん？　目にかゝらば

天女を見るも效なし。……

あゝ、我願のさまたげ！

（以前の幻怪なる音樂又起る。妖群上下より躍りいで、）

妖合　げに〳〵、願のさまたげ！

老　すておかば家のわざはひ……

（妖群老翁のほとり近く跳れまはりて）

妖合　げに〳〵、家のわざはひ!!

此曲もまた二三回折返すと以前の青年太き枯木の枝を提げて木陰より現ひ出る。樂調一段の凄味を加ふ。月雲間に隠る。青年木の枝を握つて老爺の背後に近づく。妖群狂舞して爆動するが如き分をす。殺氣を帶びたる幻怪樂につれて青年老爺を一擊の下に打殺さんとす、老爺危く引きすかして、同じ音樂につれて立廻る。此間妖群二派に別れて、一は青年に後援し、一は老爺に後援するが如き科介して狂舞す。とゞ青年は誤つて老爺の爲に枝を奪はれ、其はづみに足を蹈外して深き淡に落入る。

妖群狂舞。

老爺よろめき倒れ、しばらく茫然たる體、やがて半狂亂の體にてよろめき〳〵山嶺の方へ登り行く。

野趣を帶びたる、されど突兀として顫きがちなる音樂の次第に遠くなりゆくと同時に、以前の幻怪樂は一段の狂味を加へ來りて妖群狂舞す。逆立して歩するものあり、とんぼ返りするものあり。此内舞臺次第に暗くなりて、遂に眞の暗となる。

* * * * * * * * * * * *

第二場

幻怪樂の殆ど全く消えんとすると同時に一種微妙なる天樂の聲聞え來る。其聲の近くなるにつれて舞臺次第に明るく、遂に皎然たる月夜の景となる。

比治山の絶巓、其形狀奇特なり、譬へば富士山の頂上の如く、中央は凹み、其周邊の巉岩は蓬の花の滿開せる如くに開き亂れ、其凹みたる處の一角より水晶をさながらに溶解したるやうなる清泉長永に湧き出で、年々歳々水量を加ふるゆゑに、此の清泉の溜れる凹みは、常に一小湖の形をなし、其底は透明りて手に取る如くに見ゆれど、其深さは測り知られず。

正面の一部巉岩の著しく低くなれる處に清泉の一面見ゆ。上手に小山の如き巨大なる巉岩、其の他尚上手にも下手にも夥多の怪巖高くまた低く峙ち、老樟、古槐、蔦蔓の纏へる巨松など其上に掩ひかぶさる。あちこちに白き赤き躑躅、見なれぬ高山植物の花など。上手の巨大なる巉岩の頂、腰、裾、其他ところ〴〵に玉の如き肌膚の透きて見ゆる白き羽衣を輕く緩くはふりたる七體の天女、今がた天より降りたる體にて、或は立ち、或は臥し、或は腰かけ、或は寄りかゝりをりて合唱す。(三人と四人とに分れて、交互に合唱す)。

甲群　高きを離れて低きに遊ぶ。
高きときには虚空の際涯、
低かるときには底ひも知らず。

全群　おもしろ！　おもしろ！

これにて全群巖を離れ、平たき處に降り、微妙なる樂につれ、手を取りあうて緩く舞ひ廻る。

乙群　高きを離れて低きに遊ぶ。
低きに居れども清き眞清水、
高きを望まば輕き羽ごろも。

全群　おもしろ！　おもしろ！

間奏次第に急調となる。それにつれて樂しげに舞ひ廻るうち、一人づゝ〳〵手早く羽衣を脱

ぎ、巨巖のあちこちに懸けおきて、裸體となりて、そこ〳〵の巖頭より正面の泉の中へ飛下る。かくて水浴しつゝ唱ふ心にて、岩の間の水上に、樂しげに泳ぎ浴する七天女の、黑髪をたゞよはしたる頭、肩、手など交る〴〵見ゆ。

甲群　高きを離れて低きに遊ぶ。
高きときには虚空のきはみ、
低かるときには底ひも知らず。

全群　おもしろ！　おもしろ！

この以前より（上手奥の方より）前の場の悲涼清婉なる笛の聲再び瀏亮として聞え來る。微妙なる天樂かすかになりて第一の天女先づ唱ふ。（天女の姿は巖蔭にかくれて見えず）。

一天　あやしや、あの物の音！

全群　あやしや、あの物の音！

二天　迦毗陵の聲にも似ず。

三天　天樂の音にもあらず。

四天　生れし聲か？

全群　あらず。

五天　作りし聲か？

全群　あらず。

六天　心耳に徹る甘露！

七天　荒ぶる自然も和ぐ。

全群　あやしきあの物の音!!!

七天女おの〳〵正面巖の間より半身をあらはして笛の音に聽惚れたる體。

此中前の場の突兀として聽くやうなる野調の樂聞え來る。此中第一、第二の天女偶と下手を見て驚く思入。樂調俄かに亂れてけたゝましくなる。

一、二　あはれ！　あはれ！

穢きもの

三、四　物かげより

此方を見る！

これにて一より六までの天女はあわてゝ水を出で

合唱　かづけころも。

疾く羽ごろも！

皆々巨巖へかけよりて脱ぎおきたる羽ごろもを被り、泉の方を見下して第七の天女を呼ぶ。

一、二　あはれ！　あはれ！

など來まさぬ？

三、四　穢きもの

のぞき窺ふ。

合唱　かづけころも。

疾く羽ごろも！

此時野調の樂近く且つ高くなる、と前の場の老爺下手より窺ひいづる。六天女げたゝましき叫聲を發す。

合唱　あはれ！　あはれ！

遲し最早!!

六天女おの〳〵羽衣を引掛け〳〵、舞上る介して、上手巖かげへ消える。老爺這ふやうにして窺ひ寄り、巖上に殘しある第七の天女の羽衣を取らんとす。

此間始終他の音樂を繼うて以前の笛の音淵亮として聞ゆる。

六天女羽衣をひろげつゝ、中天高く舞上りながら泉の方を見下し、手を振り、袂をなびかして唱ふ。

合唱　あはれ！　あはれ！

遲し最早!!

此時まで少しも動かず、石にて刻める裸體像のやうに、中央なる或岩かげに後向に上半身をあらはして憩へる第七の天女、笛の音に聽惚れたる體、此時はじめて頸垂れたる顏をあげて獨唱す。

七天　あはれ、一滴に千歲を醒めぬ

天の靈漿に我醉へるにあらず。

心雲を離れ、地をも離る。

人と天と地と融合ふか今！

あはれ、あの物の音！　あの物の音！

笛の音忽然として止む。野調また盛んに起る。羽衣を不審げに打返し〳〵詠めゐたりし老爺喜色を満面にあらはして獨唱す。

老　うれし！　うれし！　天女を見つ。

うれし！　うれし！　羽衣得つ。

願ひごとは必ず成らん。

うれし！　うれし！　疾く家路へ。

合唱　あな、あさまし其羽衣を!!

第七の天女此時はじめて心附き愕然として起つ。

と麓の方へ去らんとす。微妙なる天樂かすかに聞えて、遠く高く六天女の聲にて

七天　あら、悲し、我羽衣を！

羽衣を奪ひ去られぬ！

あら、悲し、我羽衣を！

合唱　あな、あさまし、其羽衣を!!

第七の天女巖上に立ちて此方に向ふ。恥かも裸體を恥づる色なし。

七天　なう、其羽衣返せ我に！

老爺天女の神々しき姿を見て我を忘れたる體。しばらく無言。此間かすかに天樂の響。

老　あゝ！……

こはいかに眼昏む。

星の目よ！　玉の肌膚！

美の力けふぞ知りぬ。
我知らず心牽かる！

手に持ちたる羽衣を取りおとし、磁氣などに牽かるゝ樣に、二足三足天女の方へ近づく。

七天　なう、其羽衣返せ我に！

老爺は尙恍惚として天女に見惚れてゐる。

老　美の力けふぞ知りぬ。
戀か是れ？　若きが迷ふ……
あゝ、我子、　戀の奴！
あゝ、我子！　世にあらぬ子！

七天　なう、其羽衣返せ我に！

老爺はじめて我に返りたる思入。

老　いや〳〵……
年ごろの望遂ぐる
質草の此の羽衣、
返されず遂げぬうちは。

七天　いで、其望今叶へん。
まづ羽衣を返せ我に。

老　そは詐りて逃げん方便。……

七天　あさましや其疑念！
虛詐は人のならひ。

天上に無きためし。

老　さらば先づ靈驗見せよ。

七天　語れ汝が望むことを。

（これにて老爺思ひ惑へる體。）

老　あゝ、其望……其望！

たゞ一つのみ叶ふ望！

（天女うなづきて）

七天　たゞ一つのみ叶ふ望！

（老爺ますゝ思ひ惑へる體。）

老　あゝ！

財貨をのみ欲りせし我、

美を知りし今日願望増しぬ。

あゝ、逢はまほし又の春にも！

人の愉樂戀に如かず。……

あゝ、戀の奴、死にし我子！

七天　語れ疾く望むことを。

（老爺尚思ひ惑へる體。）

老　されど、されど……財貨も欲し。

あゝ、財貨！……

ありとあるものを買得る力！

名をも榮をも友をも世間をも！
あゝ、財貨！　力の本源！

七天　語れ疾く望むことを。

老　あゝ、又の春！　若き盛り！
人の愉樂春に如かず。
輕き心、敏捷き手足、
見聞くもの皆新たに、
憂きは忘れ、物に怖ぢず、
戀に夢に日ねもす醉ふ……

あゝ、又の春！　若き盛り！
人の愉樂戀に如かず。……
あゝ、戀の奴、死にし我子！

（此時上手岩石の間より前の場の美少年うかゞひ出で、長き枯枝をさしのべて老爺が取落したる羽衣を搖寄せて取る。）

七天　語れ疾く望むことを！

（老爺は尙思ひ惑へる體。）

老　あゝ、血を分けし我生みの子！
貧人の上無き寶！
あやまちて殺しゝ我子、

あゝ、生かさばや身に易へても。……
されど、されど……財貨も欲し！
あゝ、財貨！　力の本源！

少年　よきもの得たり！　これだにあらば！

（此中美少年は羽衣を取得て上手の小高き巖上に突立ち）

（と二度繰返し歌ひて上手へ去る。第七の天女かくと見て驚き叫ぶ。）

七天　あはれ！　我羽衣をば！

（老爺もはじめて心附きて驚く。）

老　やゝ、わが得つるものをば！

七天　あら悲し！　わが羽衣！

老　あら悔し！　得つるものを！

（天女地上に臥しまろびて號泣す。）

七天　あはれ！　あはれ！　翼無き身
空へ翔べず。人ならぬ身
こゝに長く留まりがたし。
あゝ、あさまし、我身の果！

（上手奥の中空にて六天女の聲々。）

合唱　あゝ、あさまし、その身の果!!!

（此中老爺思入ありて）

老　嫌して伴れてゆかばや、

奪られし物の代りに。

七天　あゝ、あさまし、わが身の果！

合唱　あゝ、あさまし、その身の果!!!

老　ともかくも山を下り里へ來ませ、
やがて我探してん羽衣をば。

（老爺第七の天女の傍によりて親切げにいたはることありて、第七の天女はそれに耳を假さず、天を仰ぎ地に臥しまろびて悶へ歎く科介。）

七天　あゝ、悲し！　昨日までは
千里の外見たりし目
睫さへ見る能はず。

行住如意の羽翼もなし。
地に生りし身ならねば
人に劣る天の兒！
あはれ、我無きにひとし。
進退たゞ世人のまゝ！

（老爺いたはり慰めて）

老　ともかくも山を下り里へ來ませ。

（天女餘儀なげに起ちあがりて、老爺に手を引かれ、下手へ向ひながら二三度折返し歌ひつゝ歎きながら降りゆく。）

七天　あゝ、悲し！　あゝあさまし！

天樂聲かすかに、一種言ひがたく凄慘なる悲哀の調を帶び來る。それにつれて六天女の合唱天の一方に聞ゆる。

合唱　あゝ、悲し！　あゝ！　あさまし！
羽翼無き天つをとめ！
際涯なき空を離れ
底知らぬ淵に沈む。
あゝ、悲し！　あゝ、あさまし！

此途端、以前の幻怪樂騷然として起り、上手、下手より前の場の妖精群狂舞して入來り縱横無盡に跳れ廻る。

妖合　毛の無き獸類と人こそなりぬ。
翼無き人たる天女を見よや！

世界は今ぞ我が有！

合唱し了りて一齊に大笑し更に手を取りあうて狂舞す。其間を縫うて、次第に遠く微かに、六天女の哀弔の合唱聞ゆ。

天合　あゝ、悲し！　あゝ、あさまし！
羽翼無き天つをとめ！
際涯無き空を離れ
底知らぬ淵に沈む。
あゝ、悲し！　あゝ、あさまし!!

天女の合唱の遠く微かになりゆくにつれて妖群の狂舞はますゝ激しくなる。

妖合　毛の無き獸と人こそなりぬ。

翼なき人たる天女を見よや！

世界は今ぞ我が有!!!

歌ひ了りて又一齊に大笑し、更に手を取りあうて狂舞す。此大雜沓、大噪音のうちに幕しづかに下る。

六天女の哀弔の合唱かすかに〳〵聞ゆ。それを繼うて妖群の笑ひ聲。

* * * * * * * * * * * * * * * *

歌劇の輸入

（四十四年八月）

日本に歌劇を起さうといふ企は六七年以前にもあつたが、一二の一寸とした試み位で立消になつてしまつた。近頃また帝國劇場が柴田環氏を聘して歌劇の創始を計畫しつゝあるといふのが動機となつてか、オペラ輸入問題があちこちで再燃せんとする形勢である。

我藝術界は何れの方面も今は新しい試みの時代である。何でもやつて見るがよい。オペラの輸入も無論結構である。油畫が司馬江漢以來明治四十年代の今日迄に段々錬磨を重ねて漸く見るに足るものとはなつたが、猶外國人に鑑賞させるものとしては大分距

離があるといふことを記憶し、且つ畫は一人の天才の力だけでも大傑作を出すことが出來るが、オペラとなると普通の演劇よりもずつと條件の複雜な大綜合藝術であるから、それら多方面の調和を成就することが非常にむづかしいといふことをも記憶し、さうして心長くオペラの培養に盡力したなら此事業も決して絶望的ではあるまいと思ふ。

餘りむづかしく論じ立てゝ當事者の勇氣を鈍らせたくない。單に唱歌するといふことにさへ堪能な人々は數へる程もない我國にあつては、手近くオペラの俳優團を組織しようなぞとは殆んど戯談のやうにも聞え、實際非常な難事業に相違ないが、御存知の如くオペラもいろ〳〵である、例のバンドマン一座式の滑稽オペラの眞似事位は器用な日本人の工夫を以てしたなら、五年か七年のうちに出來ないものとも限らぬ。而して其位の者でも舊式の所作や淨瑠璃物や大阪俄や新派の喜劇物抔よりは新代の青年連には歡ばれるであらう。

時勢の推移は如何ともしがたい。丹頂の鶴は勿論鷺や鶯や杜鵑がだん〳〵內地に少なくなると同じに、我舊演藝はおひ〳〵と滅びゆくのである。動物園に飼はれてゐる鶴のやうに現に目の前に活動してゐるから、まだ〳〵かういふ鳥は絶えぬと思つてゐると、いつ亡びるまいものでない。

五座で擁護され素人謠の流行で維持されてゐる能樂は、取りも直さず動物園や花やしきや華族や紳商の庭園に飼はれてゐる鶴で

ある。いつ舶來の白鳥（スワン）と交換されるか分らぬ。又歌舞伎や俗曲は鸚鵡や鸚可が流行るにつれて衰へるであらう。これも其筈實際洋式建築や庭園やハイカラな服裝は鶴よりも白鳥（スワン）、孔雀や鷺や鶯よりも鸚可や七面鳥や鵝鳥の方が似合ふのである。

畢竟輸入と輸出とは相身互である。近頃は外國といふうちにも。露西亞の舞優間には、或は多少我所作事に暗示を得て工夫したかと想像さるゝやうな一種の舞踊劇が盛んになり、女優にも男優にも其方面で世界に名を成すものがある樣子。うつかりすると日本獨得ともいふべき振事の劇までも外國へ取られてしまふかも知れぬ。鶯は外國へ行かねば聞かれぬ樣になるかも知れぬ、或日本の古名畫は外國へ行かねば觀ることが出來ぬ樣に。

オペラ輸入もわるくはないが、此際我特有の樂劇たる振事の劇を新時代の要求に相當するやう新しく發展させることを忘れるのは愚かである。發展の工夫は幾らでもある。但し或人々の唱ふる如く、日本特有といふ點に安心して舊株を守つてゐるのは自滅の基である。如何に特有だからとて、いつも〳〵『勸進帳』、『紅葉狩』、『戻橋』、『二人袴』などといふ能狂言の燒直しばかりでは始まらない。演藝もまた國家の獨立と自尊とを標示する一機關であることを思ふものは、此際大いに心せねばならぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

舞踊劇

（四十四年八月）

舞踊劇といふ言葉は、日本にも西洋にもツイ近頃まではなかつたのである。日本では私の所謂舞踊劇のことを、在來は所作事とか、景事とか、振事とか、時としては漠然舞とか踊とか呼んでゐたものである。劇場で演ずる『勸進帳』、『紅葉狩』、『山姥』、『關扉』、『瀧夜叉』など、其他踊の師匠が催す溫習會の出し物など、俗に淨瑠璃物とか段物とかいふたぐひは、概して舞踊劇と稱してよい。これらは將來は知らず今のところ日本特有の一種の樂劇で西洋には無い。

普通の劇は白と科介と表情とが主であるが、舞踊劇は音樂と地

方の唱歌とを合せて表情しつゝ舞踊するのを主とする劇である。普通の白や科介も時としては混へ用ふるが、それはホンの合の楔なのである。且つ始終音樂の節奏や拍子に伴ふやうにする。さういふ所に舞踊劇たるの特殊の本領が存し、特殊の面白味が成立つので、此點は彼のオペラが唱歌を以て白に代へる點に特色を持つてゐるのと同樣である。

外國にも近頃は舞踊劇（Choreographic drama）と名づけて差支へないものがおひ〳〵出來かけたが、あちらのには我國のやうな抒情的劇詩が伴つてゐない。抒情的劇詩といふとむづかしいが、長唄なり常磐津なり清元なり彼の文句がそれなのである。在來行はれてゐるのを直ちに抒情的劇詩などと呼ぶと御大層だが、あれに若し

眞の文學的價値、劇詩らしい內容が加はりさへすれば、たしかに一種特別な劇詩で、かういふ詩を使つてあゝいふ舞踊をそれに伴はせる組織は曾て外國にない所で、我藝術界の誇りであると謂つてよい。

併し在來のは種々の理由で、到底將來廣く行はるべきものでない。在來の所作事や振事は、第一內容が餘り稀薄でもあり、支離滅裂でもあり、荒唐でもあり、猥雜でもある。それに文句が如何にも囈語のやうに連絡がない。のみならず、餘り江戸趣味といふうちにも吉原趣味や歌舞伎趣味に拘泥(こだわ)りすぎてゐて、今の人、地方出の人には何の事だか分らない。要するに何れも過去の藝術品で、古びた錦繪のたぐひである。今尙珍重するに足るが、骨董品

として珍重するので、若い國民の血や肉を動かすものとは思はれぬ。

そこで私は餘程以前から新しい舞踊劇を起したいと考へた。內容を數段意味の深いものとし、文句をも遙に文學的のものとし、脚色も振も曲も、總て現代の思想、感情、好尙に適するやうに、全く新たに仕組みたいと工夫して、其手はじめに『浦島』といふのを作り、それから又長い短い取りまぜて、十種ばかりの舞踊劇を作つた。

私は强ち高尙がつて戀愛に關することや狹斜に關することや下等社會に關することを棄てゝしまへといふのではない。又在來の小細工の改良を施さうとするものでもない。全く新しく材料を

使つて、新しい着眼で、日本獨特の舞踊劇を起さうとするのである。今月の末に文藝協會の私演劇場で演ずるのは何れも私の作で、一は雪舟筆意を其儘に舞踊劇にした『寒山拾得』、二は同じく菱川師宣が極彩色に擬した『お七吉三』、三は『鉢かづき姫』。いづれも在來のとは種々の點に於て異つてゐる積りである。曲は吉住小三郎、杵屋六四郎の二氏が苦心に成り、振は藤間の老師匠が骨を折つてくれたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

明治の舞踊

（大正元年九月「新日本」）

明治の事物一として革新の餘波に洗はれて面目を新たにせざるものなし。文學藝術然り。四十五年の今日に於て、現在の文藝と維新當初のとを比較すれば、實に隔世の感あり。殊に小說の如きは、內容形式雙つながら全く別種の物たり。藝術はさまでには變化せざれど、繪畫、彫刻、建築、音樂、演劇の或部分の如きは、到底明治の初期に於ては見る能はざりしもの今は成立てり、然るに此例に全く漏れたるが如き藝術中の一は我舞踊なり。

明治に入りて種々の新曲の作られ、それと同時に都踊、蘆邊踊の如き大規模の餘興創始せられ、舞踊もまた新時代の要求に副はんことを努めつゝあるに似たれど、其實多少新たにせられたるは其形式の末にして、其內容よりいへば退歩あるも進境ある無し。

我舞踊の全盛時代は享保以後維新前なり。就中文化文政より天

保へかけては我所作事劇の爛熟期たり。當時の所謂芝居は半以上舞踊趣味を以て生命とせり。舞踊に長ぜざるものは俳優たる能はざるの慨ありき。錦繪によりて現代人にさへ知られたる彼の鼻高の幸四郎、七代目團十郎、水木の三津五郎の壯年期は卽ちそれなり。殊に女形は舞踊に秀づるを例としたり。瀨川菊之丞の如き、岩井半四郎の如きは其最も善く後世にも知られたるもの。今日尙行はるゝ舞踊の多くは是等諸優によりて創始せられざるまでも、其の所演を經て不朽の礎を築きたりといふべし。

文化文政より維新前にかけては、市井の娛樂機關の主なる部分將た舞踊に外ならざりき。祝祭に於ける踊家臺、各派各流の溫習會、素人の臨時の催し、通客、遊冶の主なる隱し藝など何れも舞踊を心核としたり。少くも町家の女子は舞踊の心得なきときは處女たるの嗜みを缺くが如くに思惟せられたり。舞踊の修養の有無は奧御殿奉公の一肝要資格なりき。所謂お狂言師なるものは舞踊の女敎師たりしに外ならず。

勢ひかくの如くなりしかば、江戸だけにての舞踊の流派さへ十指を屈して尙足らざる程にて、俳優の振附を兼ぬる舞踊師中に幾多の名手續き出でき。其中舞踊全盛期の殿たるの名譽を博せしは五代目西川扇藏なり。要するに維新前は西川派舞踊の最盛期にして、維新後は西川の衰滅して覇權の花柳、藤間に移れる時なり。而して花柳は西川の餘派、藤間は其傳統よりいへば、我江戸舞踊の太祖たれども、爰に所謂舞踊全盛期に於ける勢力は遙に西川の下

にありしが如し。

所作事爛熟時代は、一方より見れば我俗曲諸派發展の絶頂たりき。古きは一中、河東、竹本、長唄、新しきは常磐津、清元、新内、富本、ありとあらゆる俗曲は所作事に利用せられ、纖細なる技巧のありたけを盡し、波爛曲折の限をほしいまゝにしたり。二流三流の掛合といふことも此際最も行はれたり。舞踊の脚色の工夫も繁褥細緻を極めたり。今は廢れたる富本は、畢竟此舞踊爛熟時代の濃厚を極めたる市井の嗜好に適應せんとして發展したるものと見るべし。而して其濃厚なる富本を利用して最も複雜なる所作事に絢爛の致を盡したるは瀬川菊之丞、岩井半四郎、中村歌右衛門等なり。五變化、七變化、八變化、九變化などいふ複雜なる

舞踊は富本全盛時代の前後になれり。今日尚演ずる古き舞踊は、多く此等變化物の斷片たり。例へば如皐作『七以呂波』の如き、治助作『名殘島臺』の如き是れなり。前者は供奴、傾城、浦島等より成れど、今は概して『供奴』のみを演ず。後者は淺妻、寒念佛等より成れど、今は只『淺妻』のみを演ず。變化物は大抵長唄を地とす、必ずしも菊之丞を俟ちて始まれるにはあらず、彼れの得意の新曲は寧ろ富本に多かりしが如し。

維新に近寄りて舞踊の新曲に與つて力ありしものは、作詞者としては河竹新七（後の古河默阿彌）、俳優としては市川小團次なるべし。小團次は舞踊の名手にはあらず、されど時代の要求を察して頻りに新趣向の舞踊を演ぜし點に特色あり。されど其功は主と

して作者新七の力なり。新七は所謂大切淨瑠璃を綴るに長ぜり。一種の滑稽舞踊劇なり。『日月星晝夜の織分』（夜這星）『神有月色世話事』『縁結び』或は『粂の仙人の宙乘』。『吹矢の絲筋』等何れも新七が小團次の爲に作せしもの。

新七の默阿彌沒して後は、時代の要求に應じて自在に推移する底の作者あらず。福地櫻癡の新曲の事は尙下に言ふべし。

維新前の最も有力なる劇場顧客は江戸の市民なりしに、明治となりては地方と中央と次第に主客の位置を顚倒し來り、劇の上流に玩賞しはじめらるゝにつれて、劇其者の內容及び趣味に著しき變動を生ぜざるを得ざりき。近來江戸市民に悅ばれしものは、必然の結果として地方出の顯官、紳士、紳商等には解せられず、喜ばれず、顧みられざる運となりぬ。こゝに於てか劇の如きは、急に其需要に應ずるために、先づ其主題を改め、其材料を改め、且つ其脚色をも其扮裝をも改めんと力めたり。所謂活歷劇、勤王劇等はかくの如くにして興りたり。吉原本位、かぶき本位の舞踊の如きは、歌詞も脚色も無稽を極めたれば、地方人の最も解し能はざる所、さりとて形式美を生命とする此種の藝術に至りては遽に革新すべき途もあらず。古河默阿彌の才を以てしても總に能狂言を舞踊に燒直して一時を糊塗するの他に出づる能はざりき。默阿彌に代れる福地櫻癡の新作淨瑠璃と稱するもの將た同脈、只異なる所はます〳〵能狂言其儘に類し、且つ舞踊の本領を離るゝことの彌〻遠きことのみ。『紅葉狩』、『戾橋』、『土蜘』、『船辨慶』、『連獅子』、『望

月』、『七騎落』、『茨木』、『釣狐』、『攝待』、『素袍落し』、『二人袴』、『吹取妻』、『釣女』等は、或は默阿彌の、或は其門弟の、或は櫻癡の手に成れり。

我舞踊劇の本領は、半以上抒情的なる點にあるべきに、能狂言の燒直しを主とするに及びて、敍事的となり、平板淺露なる意味にて謂ふ劇的となりぬ。

舞踊の內容のかくの如くなれると同時に、振附の名手跡を絕ちたり。西川の家元は明治に入りて廢滅に歸し、代りて覇權を握りし二舞踊師のうち花柳壽輔は老いて逝き、藤間首都の舞踊壇を席卷し、他の流派は年々に衰へ行けり。俳優中にて舞踊の名手は團十郎、芝翫以後殆ど絕無。劇の性質の次第に著しく改まりゆくにつれて、觀者も舞踊の巧拙に重きを置かず、優人もまた其修養を主張せず。

舞踊の內容は改まりたれど、其形式は枝葉の幾分の外は舊態依然たり。指す手引く手の一擧一動に若干の象徵はあれども、元祿享保このかたの傳來のまゝの符號なれば、其大概は現代とは風する馬牛たり。加ふるに前にもいへる如く、五段返し、七段返しの連絡ありてこそ興あるべきものを、只一部だけ引離して演ずる習ひとなれるゆゑに、單に目に見るだけのものとしても感興甚だ淺く、恐らく今人は何故かゝるものが維新前にはしかく熱狂して歡迎せられしかを了解し得ざるべし。剩へ、これと同時に種々の調和せざる要素の唐突に侵入し來るありて、舞踊は其特殊なる本領を失はんとす。『關の扉』、『瀧夜叉』の如き純歌舞伎式の舞踊劇にす

ら、時としては甚しき活歴式の科白表はれ來る。油畫式の背景を用ひて夢幻的の內容を毀損することもあり。舞臺面の調和を閑却して扮裝科白に小修正を施すの例少からず。『市原野』の保正、『橋辨慶』の辨慶など、演ずるものゝ好みにて、往々作意を沒了す。加ふるに舞踊劇の本領は主として抒情的の部分に在れば、須らく手踊趣味によりて之を發揮すべきものならんに、維新以後の作十中七八までは此手踊趣味を閑却す。是れ殆ど西洋樂よりハーモニーの面白味を除き去るに近し、男女剛柔、扮裝を異にして、時に同じ、時に不同して踊る我手踊の或形式は、明かに目に訴ふる一種のハーモニーなればなり。

又或種の所作事の歌詞は、其本來が荒唐無稽にして無意義を極め、恰も囈語と一般のものなれば、之を舞踊に演ずるに當りても餘りに分別臭からざるをよしとす、例へば先代芝翫の踊の如き、今の段四郎の踊の如き、頗る其趣味に適合せり。然るに九代目團十郎が其肚藝を以て名譽を一代に博し、之を所作事にも應用して特殊の味ひを發揮し來るに及びて似て非なるもの往々現はる。現代の舞踊の多くは、分別臭過ぎて妙ならず。意識有りすぎて面白からず。思ふに分別もよし、意識もよりよし、但藝は調和を生命とす、內容の無意義に遠きものは須らく半無意識にして演ずべきなり。

名古屋に西川派あり、京都に井上流(片山派)あり、大阪に山村、梅茂登あり。量に於て、勢力範圍に於ては現代は遙に維新前を凌

ぐ、たゞ其技藝の實質に關しては、古き形骸ありて新しき生命未だあらずと評せざるべからず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

新舞踊劇の試演に就て

（早稻田文學記者に語る。）

つい此間、ある美術雜誌の主筆某氏が、偶然に來訪せられた際、日本畫の將來はどの樣になるであらうかと言ふやうな話の序に、某氏は日本畫の特長若しくは特色に關しては日本畫の專門家よりも寧ろ西洋畫を學んだ新進の畫家中に斬新な意見を持つてゐる者が多いやうである、全く新しい眼で見るから、却つて日本畫の特長に氣の附くことも多いらしく、それを將來の繪畫に應用することに就て少くとも考案だけはいろ〳〵に凝してゐる者がある、云々と話された。思ふに、演藝に關しても大分是れに類する事があらう。在來の演藝通よりも新代のうぶな鑑賞家の方が、我舊演藝に對しても、或は新しい眼で觀るだけに、却つて得る所が多いかも知れない。此の意味に於て、近頃の若い文學者の間から、そろそろ演藝批評家の出かゝつてゐるのを賴もしく思ふ。併し又全く見慣れてゐないものに接した當座には、丁度外國人が日本のものを見て、往々見當違ひな激賞をするが如くに、餘り主觀的に考へ過ぎたり、穿鑿し過ぎたりして買ひかぶると言ふ事も新批評家には有り勝ちである。左程でもないものを夥しく褒めたて、それが緣となつて一時變てこな演藝が流行し、舊演藝としては第三流以

下のものが蔓衍り、最も優良なものが却つて忘れられ、その衰廢が一段と早められると言ふやうな事がないとも限らぬ。

演劇の事は暫くおいて、丁度お尋ねだから文藝協會の九月の私演に關係のある舞踊の事に就いて言はうに、五六年前までは幾んど舞踊劇の事などは論ずる人もなかつた位、然るに近頃は最も新しさうな頭を持つてゐる人々の間にも、大分日本の舞踊の是非を說く人が出來て來た。舊劇は過去のものと一概に貶してゐる人達でさへも、舞踊だけは猶幾らか優遇すべきものゝやうに言ふ。例へば『戻橋』、『紅葉狩』、『勸進帳』、『二人袴』の類は確かに見るに足ると言つてゐる。社會一般から言つても、彼の藝妓の催しや踊の師匠の溫習會にざらに出るやうな舞踊は、多年江戸式の俗曲趣味に養

成された輩か、舊劇好きか、特に藝妓そのものにインテレストを感ずるものゝ他は興味を覺えないのが例だが、それでも名古屋の西川派若しくは京都の片山流の舞踊の如き、能狂言から脫化したやうなのには一種の興を覺えるらしい。その理は甚だ見易い。屢〻論じた如く、舞踊本來の趣味は主として狹斜趣味でもあり、又江戸趣味でもあり、純然たる歌舞伎趣味でもあるから、多少此の三趣味に通じてゐる人でない以上は、其筋立さへも分らぬ位だから、歌も言葉も殆ど外國人の寢言のやうに緣遠く、隨つて其言葉の面白味も差す手引く手の面白味も七八分通りは分らない。藝の味ひも匂ひも分らない。然るに能狂言から脫化したのとなると、謠曲ばやりの今日でもあり、脚色が比較的ずつと單純な上に、筋

も幾分か立つて居り、又詞句も比較的雅馴で分り易くなつてゐる。是等が新代に持て囃される所以である。併し正當に言へば、今日多數に喜ばるゝ類の舞踊は、舞踊劇の本領から言ふと何れも其の醇ならざるものである。僕に言はせれば二の町に屬する舞踊劇である。此の理も屢〻論じたことだが、序だから其の要點だけを改めて言はう。

オペラが歌ふことを以て本領となすが如く、舞踊劇は舞ひ踊ることと其事を第一義とする所に特色がある。然るに舞踊が從位に落ちて、普通の科白が主位に置かるゝやうな舞踊劇があつたならば、それは舞踊劇としては醇ならざるものである。彼の『關の扉』、『戻駕籠』、『瀧夜叉』若しくは『山姥』などを御覽、何れも今日の眼から

見れば、鳥居派の繪畫も大分新しいのか若しくは國貞豐國程度の繪畫を玩賞する以上の心を以て持て囃すことは出來ぬものだが、猶舞踊劇たるの本領だけはさすがに備へてゐる。幕が開いた始めから幕の閉る間際まで、一顰、一笑、一擧手、一投足の末にまでも舞踊劇たるの特色を離れぬ。白はあつても、言はゞ三絃の合の手どころの用をなしてゐる。德川期舞踊劇掉尾の發展を代表せるあの煩褥な纖細に過ぎた富本物でさへも、あくまでも舞踊が主、科白が從といふ條件だけは失つてゐない。然るに明治になつて出來た舞踊劇に至つては、殆んど皆といつてよい程に變則ものである。デジェネレーションである。義太夫劇の臍ひにあらざれば、活歴式の中へ强ひて踊を嵌め込んだやうな、淨瑠璃と科白劇とのつぎ

はぎ細工である。『戻橋』、『紅葉狩』、『二人袴』なぞの類がそれ。一さし舞へと命ぜられてから舞になるぞといふ脚色は、舞踊劇としては素人臭い趣向と言はねばならぬ。『勸進帳』の中にも辨慶が延年の舞を舞ふ件があるが、あれは酒興に乘じてとなつてゐるから自然であるが、『戻橋』の如く往來で扇子借用の舞の手なぞは苦しいと云ふよりは拙い。『紅葉狩』とても姫君樣の差す手引く手を所望して拜見なぞは妙でない脚色。それに比べると『關の扉』や『戻駕籠』は巧妙なもの。駕籠舁が駕籠を擔いで花道から出るのが、それが悉く舞踊になつてゐるなぞとは殆んど今人の思ひつかぬ所である。『關の扉』とても同樣、物語をするのも、問答をするのも、喜怒哀樂一切の表情が悉く舞踊と纏綿してゐる所が面白い。そこに舞踊劇たるの本領があり、特別存在の理由がある。オペラと相對して遜色なき一種特別の劇であると僕が主張する所以はこゝにある。竹本物にまがふやうなのは舞踊劇の外道異端といつて好い。而して明治に持て囃されてゐる類は、能狂言の燒直しにあらざれば竹本劇の化物、ところ〴〵寫實になるだけに興がさめる。『大森彦七』の如きはその適例である。

次に能狂言の燒直しも、舞踊劇としては賤ひものである。能樂全盛の元祿、享保の昔に何故歌舞伎劇が最初舞踊劇の形式で興つたかと云ふ事を考へたなら、今更にクラシックもクラシック、最も貴族的な能樂式へ筋もその儘、文句もその儘といふ程度で逆戻りする事の當然でない事が分らう。あの頃ですら、能樂は貴族的に偏

してゐるので、平民卽ち社會一般の趣味には適はなかつたのである。或は今は敎育が進んで一般の趣味が德川期中の貴族趣味を玩賞するに足ると言ふ人があるかも知れぬが、今猶本物が盛んに一方に行はれてゐて見れば、同じやうなものを並べるのも藝術としては重複であり、本物と比べた時分に流石に賤ひ物だけに興がさめる。『勸進帳』は能から脫化した舞踊劇中の最も優良なものであるが、九代目團十郎が亡くなつて見れば、到底能の名手が演ずる『安宅』とは比べられない。或は「そんな事はない、あれはあれで面白い」と言ふ人があるかも知れぬが、――能狂言をよく味はぬ人などにはさう言ふ說を張る人が殊に多いが、――藝妓輩の本行がゝりをすら喜んで見る人も多い世の中であるから「あれはあれでよい」と言はれゝばそれまでゝあるが、藝術としての品位、本領から言ふと妙でないと言はねばならぬ。能狂言にはその道相應の題材もあり、組織もあり、文章もあり、音樂もあり、技巧もある。それらを或程度までは、俗曲へ借りて來る事も出來るが、筋立までも詞章までもそつくり其の儘當篏めるといふ事は、藝道の根本から見て間違つてゐると言はねばならぬ。まだしも狂言の方は能の理想的なのに對して、寫實的に出來てゐるものでもあり、且つをかしみを主にして俗に通ずるやうに作られてあるから、それを俗曲へ適用するのも强ち不道理ではない。言ふまでもなく、我が演劇は狂言の適用から始まつたのである。併しそれは元祿、享保に於てこそ適當であつたのである。今日は最早や涸れかゝつてゐ

る狂言の古井戸で二度目の供給を求むべき時でない。鐵管で水道と言ふ時代である。

要するに能や狂言は、繪に譬ふれば如何に新しく見ても、雪舟、元信乃至古い繪卷物などに現はれる滑稽畫である。俗曲に基く舞踊劇はずつと古くば師宣、祐信、近くば歌麿以下豐國、芳年などに比すべき浮世繪である。繪卷物の中にも、隨分後の浮世繪と氣脈の通ずる風俗畫もあれば、今猶參考に資すべき面白い畫風もあるが、大體に於ては何れも過去に屬すべきものである。況や今更雪舟、元信に逆戻りして明治時代の美人畫を描いたり、風俗畫を工夫したりするでもなからう。少くとも想を構へる上から言ふと、寧ろ外國の風俗畫や空想畫や神話畫などを參考した方がよいと思

ふ。それと同じ道理で、明治の新舞踊劇を興さうとするならば、少くとも組織の上では、オペラや滑稽オペラやパントマイムやヴォードヴィルの類を參照した方が面白からう。

僕の多年唱ふる所は、舞踊劇はあくまでも舞踊を主とすべきである。白はなるべくない方が好い。止むを得ず用ふるとも、それはほんのツナギまでに用ふるのである。又歌の文句は能ふ限り、抒情詩的にして舞踊はその情懷を表現することを第一義とする。在來の如く人物の情緒には殆んど何等の關係もない、唯流麗一點の敍景、敍事に合せて舞踊させると言ふ樣な事は、全然除きたいと思ふ。且つ手踊を必ずのやうに利用する。これは恰も歌劇でいふと齊唱のやうな味はひのもので、これがなくば舞踊劇の本領は

半分がた滅びてしまふといつてよい。明治出來のには此部分の全然缺けたのが多い。而して既に舞ひ踊るといふ事が本領である以上は、是れに伴ふ音樂は今日の如き比較的單純なものでよい。音樂の專門家から見ては、原始的と言はれるやうなのでも差支ない。時々は西洋の樂器及び其旋律、其拍子、其複雜な巧緻な音樂上の工夫をも混へ用ひたいと望む事もあるが、大體に於ては、三絃の方が日本式舞踊劇には適すると思ふ。少くとも今のところは絃の方が日本語に適し、隨つて歌章の意味を明かにする事が出來る、手が單純であつて音色が靜かであるからである。音樂が主でないだけに舞踊が引立つ。舞踊對俗曲の關係は、屢〻論じた通り、草双紙に於ける挿繪對地の文の關係である。然らざれば繪卷物の味はひである。草双紙や卷繪物は繪を主とすべきもの、文は從である。

外國にも種々の舞踊があつて、特に劇場に行はるゝものゝ中には、多少劇がゝつたものもあるが、つい此の頃までは舞踊劇と言ふ名目は（僕の寡聞の故でもあらうが）聞かなんだ。もつとも數年以前に米國の女優中に、「ギリシャ踊」と言ふ樣な名稱で一種の踊を始めたものがあつて、歐羅巴大陸までも渡つて一時評判があつた。その間に幾つも似寄りの踊が出來たといふ事は、彼地の新聞や雜誌に見え、現に其興行を見物して報道してよこしたものもあつた。僕自らも嘗つて一寸紹介した事があつた。それは「ギリシャ踊」とは言ふものの、その實は日本の踊からも多少ヒントを

得たものであつたらしく、在來の西洋のに比すれば多少芝居めいてゐるものであるらしかつた、が、猶舞踊劇とは名のつてゐなかつた。然るに聞けば、ロシヤには早くから男女入り混りて演ずる一種の舞踊劇團があつたさうで、近頃名高いのはパヴローワといふ女とモルドキン(Mlle Pavlawa et M. Mordokine)といふ男である。彼等はツイ二年以前に紐育のメトロポリタン・オペラハウスに出演して、大喝采を博したことがあつたさうだが、今年の冬になると又更に大擧して米國で同種の舞踊劇を演ずるとか言ふ話。所が亞米利加の女優にガアツルード、ホフマンと言ふのがある。これは嘗て例のサロメを演じて評判を取つた女ださうなが、先頃佛の巴里に滯在中右のロシヤの舞踊劇を見て思ひ付いて、此の冬の大興行に先立つて拔けがけの功名をしようと企て、あるロシヤの舞優團と結託して、つい此の間一興行して大評判であつたと言ふのが例の『シャトル』に見えてゐた。その出し物は三種で、一つは『クレオパトラの悲劇』、次はショパンの樂に合せての種々の舞踊、三は『アラビヤンナイト物語』から筋を取つた東洋風の戀愛劇であるとの事、其筋もざつと雜誌に見えてゐるが、詳しい事は分らず、舞踊の特質も挿畫に見えてゐるだけでは一向に分らぬから、我舞踊劇との異同なぞは窺ひ得べき便宜もないが、『シャトル』に見えた所だけでは、どうやら音樂に伴つて踊る許りのもので、少くとも我舞踊劇式の歌の文句なぞはないらしい。白のあるなしも分らぬ。それはともあれ追々外國でかやうな劇がはやるやうになつて

見れば、舞踊劇は日本の特有であるなどと自惚れてはをられぬ。

外國で新式の舞踊がはやるにつけて、或者は愈〻日本の音樂の幼稚なのを殘念がる。せめて日本の音樂がも少し發達してゐたならば、我が特有の舞踊劇を發展さするのも比較的容易であらうのにと思ふ。しかし前にも言つた通り、我が音樂の原始的なのは必ずしも深く悔むには及ぶまい。近來外國の音樂通が、一時の好奇心のみでなく、眞に我が能樂を悦ぶことがある所以を考へて見るがよい。此の頃音樂學校の湯原氏も何處かで論じてをられたが、外國人が日本音樂の比較的原始的な、隨つて比較的自然な味ひを賞美することの日本畫に對するが如き時代の來るのも、或は遠くあるまい。次第に或種の外國人は、日本の俗曲に趣味を持ち始め

つゝあると言ふ。蓋し西洋樂は餘りに巧緻で、人工の極に達して、もはや爛熟もその頂點に達してゐる。オペラと言ふものをよく知らないでこんなことを言ふのは口はゞつたいが、書物を透して察するに、彼のオペラの如きワグネルを經て今のシトラウスに到つては、もはや行き所があるまいと想像される。音樂ばかりでなく西洋文明は、あらゆる意味に於てその極點に達して殆んど全く行き所がなくなつてゐる。どの方面も餘りに人工的であり、機械づくめであり、精を極め巧を盡してゐる。その片影は飲食物にさへも見える。一寸した舶來の菓子にも見える。日本の菓子には香料が使つてない、果實の汁が使つてないから幼稚だと論ずる人もある。僕には西洋菓子のあの香の高いのは辟易する。僕は總體に西

洋菓子を好まぬ方であるが、チョコレート・クリームなぞは稀には摘む方であつた。然るに此の間買つたチョコレートは喰へぬ。中にレモンだか何だか果實の香の高い、而もいろ〳〵なのが入つてゐる。味のある上にも味をつけようと思ふからくどくなるのだ。外國人中にも僕等と同じ感じの人もあるらしい。果してその故かどうだかは知らぬが、西洋の菓子中にも時々淡泊なのがある。風月堂主人がパリで直傳して來たとか言ふ折紙付きの、ある何とか言つたつけ、珍しい西洋菓子を先頃或人から貰つた。バタを使つて、見るから品のよい茶がゝつた、極めて淡しい煎餅の樣に製して、それを卷煎餅の形にしたもの、一つ嚙めば全體がぼろ〳〵と碎けるほど脆く輕い。味も極めて上品で淡しい。純然たる日本好み。と

ころがをかしい事にはそれが、僕が幼少で美濃の田舍にゐた時分、文久一つ持つて行つて幾つも買つた駄菓子屋の菓子に似てゐる。無論味こそは華族樣と昔の折助程の相違であるが、その味の淡しさと色合と格好と全體の組織や特質は全くその儘である。をかしい暗合ではないか？　それからもう一つ。つい此頃同じ人から貰つたチョコレートの菓子。僕は自分で珍しい菓子なぞを買つて來ることは絶無である。珍しい菓子はいつも到來物である。それは僕には氣に入つた。味も氣に入つたが、聯想が面白い。先づそれが昔の寺子が天神机で用ふる三文墨の形をしてゐる。香ひ入りでも何でもないチョコレートで、無論色もチョコレート色で赭がゝつて黑い。味は普通のチョコレートの味だが、舌に融ける鹽梅から其格好

の無造作な所が、同じく僕が幼少の頃、田舍で嚙つた覺えのある黑砂糖のかたまりに似てゐるのが面白からうではないか？　思ふに此の二つの菓子の聯想は、無論偶然の事であらうが、兎に角外國人とても、悉くしつこいものばかりを好むと言ふのではなく、其幾分は暗に原始的なものや單純なものや淡泊なものを求めつゝあると言ふ事を想像しても差支ない證になる。此の意味に於て僕は我が舞踊劇の伴奏の幼稚なのを强ちに悔まぬ。寧ろ此の單純な俗曲を利用して、新式の舞踊劇を發展させたいと望む。此の意味に基づいて立案したのが、今度の私演に持ち出す作物である。

例によつて例の如く其原案がいよ〳〵舞臺へ上るとなつては其儘に實現される事は甚だむづかしい。作者の空中樓臺は百二三十階であつても、實際は三四階程度、而も亞鉛張ですますのは是非に及ばぬ。何れ見て貰つてからまた何かと話す事があらうと思ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

寒山拾得

舞臺正面は二間の床の間、それに相應した大幅の掛物は雪舟(又は元信)筆に擬したる墨畫の寒山拾得と見せて背景だけが畫、立方は寒山拾得に扮裝ちて活人畫式に背景に接近して立つ。二人とも鼠がゝりたる服に古びたる墨染の腰衣、一人は卷物を、一人は箒を携へてゐる。はじめ謠曲がゝり、中頃より長唄。

「粤に寒巖に居して、既に經たる凡幾年、棲遲して觀自在なり、時に歌曲を口ずさんで、世の憂きふしは白雲の、寂々たるたゞずまひ。

此中本行がゝりの振ありて、寒山拾得靜かに舞臺の中央へ出る。

「石を枕に芝草を、いつも敷寢のつれ〴〵は、古

き佛の書を友、
「暦なけれど花に知る、春は籃に早蕨を、秋は果
實をとり〳〵の、此山間の樂みよ、我身ながら
に羨まし。

二人よろしくありて、拾得は胡坐し、寒山獨り徐かに舞ふ。

「聞けよ君、泉が撫づる伯が琴、子期ならなくに
我れならで、誰れ辨へん此調べ」面白の樂の音や。

拾得立上りて畫中の松ケ枝に掛りたる造り物の瓢を取下し、二人一しよに舞ふ。

「いざ酌まん、泉に湧ける甘き酒、瓢に酌みて飲
まうよ。

寒山胡坐し、拾得ひとり舞ふ。

「大海の、水に邊りは無きものを、寄り來る魚の
千萬が、同じ餌食に打群れて、相食噉す癡肉團
「さとらねばこそ妄執の、雲間にかすむ月の影。

合方俄に賑かになると寒山踊つて出る。

「出たわ〳〵、お月どのが出たわ。

これより狂言がゝり、禪家の問答模樣、拍子にかゝりて白を言ひ、合方につれて踊り廻る。

拾「萬年昔の山々は
寒「今も見る山々。
拾「萬年昔の溪々は
寒「今も見る溪々。

捨「萬年昔の月影は
寒「今も見る月影。
二人貌を見合せて
二人「ハ、、、、。
寒「お婆おのしは何處からこゝへ、父は何者、母は
誰れ？
捨「父は鎌、母はかつちり燧石、飛んだ火花が
寒「ぬしか？
捨「おれぢや。
寒「おれぢや。

捨「ぬしぢや。
二人貌を見合せて
二人「ハ、、、、。
捨「お爺、おのしは幾つになりやる。
寒「われは虚空と同い年、なんの虚空は死にやろと
まゝよ、山河大地を我子に有てば、此方は變ら
ていつまでも。
捨「淨躶々、赤洒々、
寒「淨躶々、赤洒々。
よきころより空也念佛の振になる。

「山深く月澄みて、颯々たる松の風、水音清き岩蔭に、鶴の翼を休めける。

元の通りの畫面になさまりて幕。

踊手の都合によりては此間始終假面をかぶりなり、居處にて引抜き、寒山は次の畫面のお七に變り、拾得は一たん引込みて吉三に變りて出るもよし。若し踊手が、二曲別々ならば、假面を用ふるに及ばず。

* * * * * * *

お七吉三

師宣(又は春信)の筆意

正面に七尺の六曲金屏風、これに師宣又は春信筆浮世繪に擬して寺院の一室より庭を見たる

景、上部に紅葉の枝、障子、緣側及び廂等をも畫心に畫き、緣先には秋草。幕あくとシンミりしたる長唄、本堂の方に葬式ある心にて、折々鉦、鐃鉢の音など聞ゆ。お七誂への黑羽二重の小袖を抱いて後ろ向に立身、唄につれて徐かに振になる。

「けふぞ知る、世のうきことをうばたまの、黑羽二重や並べ紋、うき世を思ひ桐銀杏、いづこいかなる上臈の、肌振袖の紅うらを、戀の山ぶみ山道の、裾わけらしき仕立ばえ。

と小袖を使ひてよろしくある。

「そらだきの、殘る形見のいとゞなほ、つらしとてしも此寺に、あがりものかと年頃の、身につまさるゝ秋の風。

とお七無常を感じたる思入にて、ションボリとなる。

「げにも思へば一睡の、夢の間なれや花の貌、只後世こそは眞實なれ。南無阿彌陀佛、阿彌陀佛、我れをも救はせたびたまへ。

お七懷中より珠數を取り出し、文句の通りよろしくある。此間にも本堂の鉦、鐃鉢など聞ゆ

奥にて

吉白「なう〳〵それなるお娘御、慮外ながらお頼みあり。

お七「えゝ。

吉三誂への服裝にて手に銀の鑷子を持ちて奥より出る。お七見とれたる振。

七「目の鹽の、其底知らぬわだつみに、我れはおぼろの月や君。

吉「花こそ君が振袖を、吹く春風のなまめかし。

二人なまめきたる振ありて吉三鑷子をお七に渡し、指先のトゲを抜いてくれと頼むこなし、トゝお七寄り添ひてトゲを抜くこと。

七「何となる、末しろがねの鑷子こそ、二人が縁のはしとはし、別れてゐても、つい末に、逢ふとは嬉し戀の謎。

此クドキ模樣の間、吉三は始終座つたまゝ、此振の末近くなりて頭をうなだれ、思案にくる思入。お七もどかしがる思入ありて、次の唄につれて蓮葉に踊る。

七「時を待てとは、そりや氣が長い、人の心もしらがの媼と、みともないまでこちや生きうより、盛り一時眞夏の晝を、燃ゆる緋罌粟と散ろずも

の。

此中吉三だん〳〵心の動く思入。トヽお七に引出されて、共に浮かれて踊る。手踊模様になる。

「我れを君とも、君我れぞとも、分かぬ今直死なりよなら。

「天も地もなきや、親はらからも、なんで涙が落ちるやら。

踊りをはると二人抱きあうて泣く。風の音。紅葉はら〳〵と二人の背中へ散りかゝる。二人驚きて離れて起つ。

「寝ぬくもる、間あらしだつ明方や、風に谷中の鐘ちか〳〵と。

「あかぬ別れに餘る戀、さりとては狭き世の中、常夜の國もがな。

此間長く間をおきて二度ほど本鐘。又紅葉が散りかゝる。

よろしくありて師宣（又は春信）の畫面にをさまると幕。

* * * * * * * * * * * * * *

浮世繪と我舞踊劇

（大正二年四月「美術正論」）

舞踊劇と云ふのは詰り在來我邦に行はれて居る常盤津の『關屛』や、『戻駕籠』や、長唄の『道成寺』のやうな振事物、所作事物を始めとして、其れに類する新作物、其他新舊の舞踊本位の劇全體を含むものと解して貰ひたせう。所で此の所謂舞踊劇と浮世繪とを比べると、種々の點に於て似た處が有つて、其れが多少話の種にもなり、將來の藝術上の問題にも成るかと思ふ。

此の二つの者には、先づ其歴史から看て二つの相似點が有る。卽ち二者共に派生的で有り且つ尠くとも此間までは相持的で有つたといへる。派生的とは其物以前に成立つて居た或立派な藝術から

ら流れ出したもので、惡く言へば私生兒のやうなものである。先づ舞踊の方を言ふと、在來の振事や所作事は、明かに能狂言から流れ出たものである。阿國や山三の時分にはまだ三味線は用ひなかつた程原始的のものであつたが、其れが後の所作事の萌芽となつた。後年には歌舞伎劇の一部に編込まれる事となつて、歌舞伎其物の影響が加はり、其上に偶人劇の感化も添はつて、次第に複雜な組織のものとなつた。浮世繪の方面にも。之に似た歴史が有る。最初土佐派のオーソドックスな畫風から、一轉して菱川派となり、西川派と進化して往く間に、更に種々の新要素が附け加はつた。次に相持的と言ふのは、其發達史の長い間に於て、二者共に相扶掖し、相裨補する同伴的藝術といつたやうな者が有つたのを

言ふのである。即ち浮世繪は、お伽草子、浮世草子の始めから小說的文學と相助長して發達して來たので有るが、舞踊も亦諸種の淨瑠璃とか長唄とか云ふ歌曲の進歩に助けられて進化して來たのである。極言すると、詰り其れ自らだけでは充分獨立し得る程の藝術には成つて居なかつたと言つてもよい。浮世繪の如きは、文政度以後のデケーデンスに達するまでの中に、隨分名匠が輩出して居るに係はらず、尙美術上の品位に於ては、他のオーソドックスな諸派には劣るものとせられて、役者繪とか、美人畫とか、小說の挿繪とかの範圍を其勢力圈として微々として居た。舞踊劇とても類似の有樣で有つた。同じ舞踊と言つても、外國の舞踊の如きはそれ程相持的では無い、それ程文學の從隷とは爲つて居ない。

勿論音樂の助けは藉りる。併し外國のはグリース全盛の太古から、寧ろ器樂の伴奏と相待つたもので、我邦のやうに、歌曲有つて後の舞踊では無い。即ち外國のは舞踊が主で、器樂はほんの添物、拍子を取るだけの物だと言つてもよい。我邦のは歌曲有つての舞踊である。今ですら然うである。そこに我舞踊のユニックな特質は存するのだが、又それが爲に拘束さるゝ處が有つて、外國の舞踊程に大膽な、放縱な、不羈自由な面白味が無い。

さて第三に、現在の有樣にも二者相似たる點が有る。專門家の觀察は如何(どう)か知らぬが、局外から看ると、在來の所謂浮世繪派は、文化文政度邊で頂點に達して居るやうに思はれる。元祿享保の全盛期が次第にデケーデンスに達して、今ではもう行止まつて居る

やうに思はれる。處で舞踊も亦同じやうな有樣である。文化文政度は其爛熟期で、それから一年毎に餘りに技巧が勝過ぎて濃厚を極めて纖弱になり、猥雜になり、卑俗と言はゞ卑俗とも言へる。其末となつては、何れも洗張や仕立直しに外ならざる作ばかり。明治になつて芝居其者が多少高尙にも成り、且つ活歷熱や有職故實熱が盛んになつて以來は、其れが舞踊の作意にも影響し、此方面に幾分の新工夫を試みた者も有つたが、要するに着想の枝葉や手法や賦彩法の幾分が上品に成つたり、寫實的に成つたりした位の處、謂はゞ浮世繪が芳年、永瀧と進化して來た程度である。尠くとも此點までは、二者頗る似て居ると謂へる。まだしも浮世繪の方は、芳年、永瀧以後大分著しく進化したやうだが、舞踊の方

は更に進まぬ、全く行止まりの氣味である。

此の行止りを僕は甚だ遺憾に思つて、十年以前に新舞踊劇論を唱へたのである。其頃には餘程調べて居た積りで有つたが、まだまだ實際の經驗が十分で無かつたので、今思ふと思ひ違へて居た事も多かつた。で其時の考への六七分は殆んど空想に歸して了つた。其れには種々の複雜な理由が有るが、其の主な理由は、所謂舞踊劇は一種の綜合藝術で、繪畫や彫刻や文學などゝは異つて、一人の力では如何とも爲難いからで有る。繪ならば芳崖若しくは雅邦一人を得ても、多少の革新的機運を促すことが出來る。所謂舞踊劇の革新は、新しい頭腦の作詞者と作曲者と振附師との有力にして大膽な三角同盟を要するのである。然るに此の十年間の經

驗は、其れが到底實現せられない事だと解つた。それから浮世繪の方でも、線と日本繪具とでは十分の自由が利かぬと云ふ人が有るやうだが、舞踊の方でも其の最も肝要な樂器が例の三絃のみで有るので、いかにも窮屈で不自由で有る。在來の經驗の敎ふる限りでは、三絃樂としては現在のが其の可能性の極を盡して居るやうに思はれる。樂器を代へざる以上は、拍子をも旋律をも變へやうが爲ささうで有る。而して拍子や旋律が變らぬ以上は舞踊の振りを變へやうも無い。道具其物を改めねばならぬか如何かと云ふ點、此の點も亦二者相似て居ると言へぬことも無い。

併し浮世繪の方は、今も言ふ通り、一人の力で隨分思ひ切つた事も出來るのだから、其處に十分の自由が有る。現に近年の浮世繪派諸氏の筆意は、種々の點に於て新面目を發揮しつゝ有るやうだ。或は外國最近の線畫法を取入れて、一種の新しい試みを浮世繪方面に爲しつゝ有る若手も有るらしい。舞踊とても全く在來の格を破つてビヤノやヴァイオリン等を利用することにして、盛んに外國趣味を取入れたならば、隨分新しいものが出來んでも有るまい。併し其れは最う在來の日本舞踊劇では無い。恰も浮世繪が外國の畫風を模倣したり、若しくは寫實を主位に置くに及んで、漸く本來の浮世繪派に遠ざかり、巧緻でも有り、濃艶でも有り、若しくは清新でも有るが、何處と無く才氣が溢れ過ぎたり、何となく生々しかつたり、或は外國臭く感ぜられたりして、少くとも昔の浮世繪とは全く異つた味になるやうなもの。其處で問題は斯う

なる、曰く、西洋趣味を取入れて在來のとは別の物を創始するか、又は題材だけを新にして手法は飽くまでも在來のを保持すべきか？是れは浮世繪にも舞踊にも當嵌る問題だと思ふ。

外國でも近來は舞踊劇が大きに流行である。舞踊はグリースの昔から盛んで有り、例のオペラにも comic opera にも彼の ballet と云ふものが必ずの樣に用ひられて居るが、併し舞踊劇と稱すべきものは、比較的近年までは盛んでなかつた。現に ballet d'action (所作踊) とか、pantomime とか、mimetic dance とか云ふ辭は有つたが、舞踊劇に相當する辭は無かつたものだ。然るに近頃では choreographic drama (舞踊の劇) とか、dance drama (舞踊劇) とか云ふ辭が外國の書籍中に散見するやうになつた。是れはアメリカのダンカンとかフラーとかデニスとか云ふ女が、グリース踊の復興と名乘つて一種の新舞踊を始めたにも原因するが、例のロシヤの大規模の舞踊劇が、佛獨英米の諸國にまで遠征を試みて、大歡迎を受けたのにもとづく。帝國劇場のロシイ氏の舞踊劇の如きも、この流行に催されて起つた一種の者で有らう。想ふに此處暫らくは、此の方面の新工夫は外國に於ても又色々講ぜられるでせう。德川期の末までは、世界にユニックな舞踊劇を有して居た日本が、獨り指を啣へて引退つて居るでも無からう。

先達て帝國劇場で、ロシイ氏作の舞踊劇「犧牲」を觀て、僕は三絃樂を基樂としてすらも、尙新工夫の餘地は有ると思つた。其處で單に其れが爲に、曲詞一章を走書して見た。其れは舊作『一休

禪師』の前へ、假に附けるものとして作つた。併し此話は實物に就いてゞなければ話したとて解らぬ事だから止さう。

要するに我舞踊劇の前途も未だ必ずしも絶望的では無い、種々の工夫が有るであらう。例へば昔の大切淨瑠璃をリファインして、俚歌童謠を盛んに利用し、日本式の comic opera を作るのも一工夫である。勿論是れには西洋樂器が必要で、隨つて三絃樂と西洋樂とを善く呑み込んで、作詞家の眞意を解して作曲する人が無くてはならぬ。作曲者さへ有れば、是れは必ずしも難くない、隨分面白いものも出來よう。振附師は、必ずしも新しい頭腦(あたま)の上手が無くてもよい、相應な相談相手が有れば、ヒントを與へる事は文學者にも出來る。過般帝劇で、日本歌劇と名乗つた妙な所作事めいた事をやつたが、彼等は全く見當違ひで有る。opera を狙ふべきで無い、comic opera 卽ち musicl comedy を狙ふべきである。

* * * * * * * *

音樂と其背景

（四十五年一月「音樂」）

五大美術といふうちにも、音樂は人心を慰藉する機關としては最も有力な作用をするものであるのに、現在の我國には時代相應の音樂が缺けてゐる。或は我國人は先天的に音樂的本能に乏しいかのやうに論ずる人もあるが、必ずしもさうとは思はれない。現在の人達に比べれば、德川時代の江戸人は、遙に深く且つ濃かな音樂的嗜好を有(も)つて居り、又常に十分の音樂的享樂を得てゐたと

思はれる、音樂に對する鑑賞上、享樂上の經驗の乏しいのは現代日本人の特別の狀態である。

其理由は簡單である。總じて藝術品の鑑賞は、半以上其藝術品が齎し來る聯想若しくは其背後に伴ひ浮ぶ種々の景物に助成せらるゝが例であるのに、今日我國に行はるゝ音樂の最も高尚な部分は、國人の大多數に對しては、單に美しき音響の集合たるに止まるのである。蓋し日本人は決して音樂的本能を缺乏してゐるとは思はれないが、其鑑賞力に於ては西洋の文明國人に劣つてゐるには相違ない。西洋でも十八世紀以前の音樂は聲樂本位であつたとの事であるが、日本は今尙其有樣にある。隨つて普通の日本人は音樂を聽くのに、耳の外に目と想像とを多分に働かせてゐる、單

に耳だけで鑑賞するといふことは極めて少ない。ところで外國の名曲を聽くとする。ソナタやシンホニーのやうな器樂本位のものでも外國人に取つては隱然として種々の聯想や背景を呼び起すものであらうが、就中彼のオペラ中の曲節であつて見れば、半以上は舞臺の聯想によつて感興を生ずべき筈、然るにそれらが何れも皆普通の日本人に取つては只の美しい音響の集合たるに止まる。音樂を聽いて陶然として醉ふといふやうな經驗の無いのも自然である。曲の內容が妖魔に關しようが、葬式に關しようが、進軍曲であらうが、春野の曲であらうが、歡喜であらうが、悲哀であらうが、外國の風物にも文學にも習俗にも繪畫にも通じない尋常人に取つては風馬牛で、只の美しい音調たるに止まる。複雜な聯想

を呼び起すべきワグネルなぞの序曲を聽いても、他のシンホニーやソナタを聽くと何の區別も無いであらう。少くとも春といふ聯想、梅といふ背景に離れた鶯に比すべきである。

これに類する事を明治生れの或人々、就中地方の或人々が長唄、清元、富本、常磐津、河東、一中等に對して經驗するであらう。是等の俗曲の多くは、彼の文化文政より天保へ掛ての歌舞伎全盛時代に、所作事の發達につれて最も著しく發展したもので、これら俗曲の感興は、少くとも半分がたは所作事卽ち舞踊の面白味である。故に舞踊及びその舞踊が象徴する特殊の風俗、其役々の特殊の扮裝、其曲々の特殊の舞臺面等を聯想せざる以上は、到底十分の感興を覺えることは出來ぬ。『勸進帳』、『筑摩川』、『舌出し三番』などは單に三味線樂として聽いても相應に面白いものではあるが、之を劇場で見たことのある者が受くる感興と全く其經驗の無い者とでは大きな相違であらう。まして『關扉』や『將門』などのやうな演劇的なものを舞臺面の聯想を離れて聽くのは、挿繪を除き去つて『田舍源氏』や『釋迦八相』を讀むやうなものである。

要するに現代の日本人の多數は、外に對つても、內に對つても、背景の無い音樂を聽いてゐるのである。

思ふに俗曲をして今のまゝで勢力を維持せしめんとするならば、同時に所作事卽ち舞踊を盛んならしむるか、然らざれば全く別に歌詞を作して新に作曲するか、何れかにせねばなるまい。且つ歌詞本位、聲樂本位を離れて間奏本位卽ち器樂本位に移り行かねば

なるまいと思ふ。吉住小三郎などはこゝに思ふ所あるらしく、頻りに新曲を作つて、長唄の獨立を唱へてゐる。併し聲樂本位で十分の獨立が出來るかどうかは疑はしい。殊に吉住派の長唄が『網館』や『鳥羽の戀塚』風の敍事詩に流れて行くのは、本來の抒情派から次第に遠ざかる所以で、其本領を失ふに近くはないかと危ぶまれる。

さうかと思へば、聲樂本位で本來は背景なしで成立つた歌澤が今日となつて新に振を工夫したといふ。まだ觀ぬことゆゑ是非するは早計なやうだが、あれらこそ獨立であるべきものと思ふ。生中『振』を添へるは餘韻を損ふに近い。先頃明治座で『さまと寢ようか五千石とろか』といふ小唄を劇に仕組んだものを演じたさうだが、歌澤に振を附けると同格の試みではあるまいか。短いところ、漠としたところに味ひがあるのであるから。

* * * * * *

舞臺上の色彩と舞踊劇

（四十五年一月一日「讀賣新聞」所載）

舞臺上の色彩は師宣の畫、鳥居派の畫、豐國の役者畫、國周の似顔畫や芳年の浮世畫、これらのものによつて代表さるゝ通りに變遷推移して今日に及んだ。

操り芝居や歌舞伎劇の衣裳の配色や色調を激賞する人々もあるが、それらは豐國以後の錦畫に比すべきもの、衣裳の色彩や染色

が褪せて一種の寂と燻みとを生じた場合を別として見れば、餘り多く歎賞すべきものとも思はれぬ。美の品位において迚も能衣裳などゝは比べられない、一概に彼れは貴族好みで高雅、此れは平民好みで鄙俗だと云ふのではない。平民好みは寧ろ天眞自然の高尚に近かるべきだから、本來を云ふと不易の趣味に富んで居べき筈だが、主として大都會の娯樂機關であつた操りや歌舞伎は、其の組織全體、意匠全體が存外ひねくれたもので、技巧の上に技巧を加へた繁褥なもので、自然な、純樸な味ひには乏しい。これは平民的とは云へ中央の浮靡な都會的嗜好をのみ是れ迎へて發達した必然の結果であらう。卽ち能も技巧的だが、操りや歌舞伎も技巧的、而して、彼れは貴族好みだから高雅に傾き、此れは一意俗受けをと覘つて發展したから知らず〳〵淺俗と云ふ結果を醸した。衣裳の仕立方、其染色、模樣、色の配合一切の上にも、此原因から生じた一種の俗な調子が附いて廻つて居る。早い話しが錦畫の調子、それも文化、文政時代のが最も深く廣く波及して居る。一言以て蔽へば俗美である。

明治十何年頃から舞臺に於ける此調子に多少の變化が起りはじめた。所謂活歴や演劇改良會の影響が次第に擴がつた。國貞や國周の畫風色彩よりも芳年式、時としては菊地容齋式のものが用ひられはじめた。漸々の浸潤であるから、餘り人の注意を惹かなんだやうであるが、これは著明な事實である。舞臺上の色彩に對する趣味の向上と云つてよい。

歌舞伎座に於ける村田丹陵氏等の努力は色彩趣味の向上をして更に一段を加へしめた。また明治座其の他に於ける洋畫家諸氏の經營も亦此の方面の新しい發展を促し、隱然として作意や藝風の上に一種の影響を及ぼさうとして居る。唯惜しい事には、目下のところ畫家と道具方と脚本と俳優と樂屋とが往々にしてばら〳〵の關係になつて居るため、所謂向上が存外に舞臺面に於ける不調和の緣となるばかりで、面白からぬ結果を生ずることが多い。淨瑠璃物や振事物の背景が油畫まがひで出來て居る抔は、西洋皿へ古風な會席料理を盛つた格で、事毀したるに過ぎない。有樂座や帝國劇場で屢〻さういふのに出逢ふ。必ずしも西洋趣味が雅でないとも云はず、油畫の色彩が日本劇に折合はないともい

はぬが、純然たる在來の振事風の劇へ色電氣を浴びせるのは酷い。油畫を使つたり色電氣を使つたりするならば作意も樂器も樂調も一切を西洋風にせねばならぬ筈である。科介も表情も舞踊の式も必ずそれに相應するやうに工夫せねばならぬ。これは自明の道理である。然るに右劇場の當事者は根つから其邊に心附かぬが如く、めい〳〵勝手な働きをして居て、平氣なのが不思議である。で折角の趣味の向上が目下のところでは餘り役に立つて居らぬ。

普通の劇に對してよりも舞踊劇と特稱すべきものに對しては、一段と此不調和が目に立つ。油畫式は、第一、三絃樂との折合が妙でない上に、日本式舞踊の振とも調和しない。振や樂調や樂器や服色が一變しない以上は舞臺劇の背景は、やはり日本畫趣味の

ものでなくてはならぬ。さりとて一足飛びに光琳式などがよいといふのではない、配色なり色の調子なりが飽く迄も日本的、而も多少浮世畫風でないと折合はぬ。

能趣味に熟通した或人さへ、或時若し『羽衣』や『松風』のやうな能を精巧な油畫式背景の前で演じたなら定めし一段と人を感動せしむるだらうと言つた位だから、帝國劇場や有樂座が舞踊劇へ色電氣を浴びせるのも不思議とするに足らぬが、かういふ考へは全くの謬想である。西洋音樂同樣の邦樂があつたなら日本の踊も數段の光彩を發揮しようものをと殘念がると一般の迷ひである。盛んに西洋樂を用ふる日本舞踊劇も早晩成立つ期が來るであらうが、その舞踊劇は最早今日のとは式をも質をも異にしたものであらう。

在來の式を追ふ以上はやはり三絃樂を主なものとせずばなるまい。

舞臺面の調和といふ事が大分世上で唱へられるやうになつたが、まだ〳〵誤つた考へも蔓つて居るやうに思ふ。

* * * * * * * * * * * * * * *

『歌麿と北齋』

イントロダクションの幕

時代

現今、四月の末。

場所

東京、どこだか分らぬ公園。

人物

美術品部賣會幹事（六十七八）。

某流行會顧問（七十以上）。

茶店の女(十六七)。
叔父の紳士(五十五六)。
甥の青年(二十三四)。
文學書生A(十八九)。
若い文學者B(二十五六)。
同　C(二十三四)
盛裝した夢二式のハイカラ娘W(二十以上)。
其友達の娘X(二十以上)。
ハイカラ娘の母、山出しの老婆(五十六七)。
脊の高い外國人(五十以上)。
其妻の肥つた婦人(四十以上)。
人力車夫。
洋服被た男二人。
中學校の學者(四十年輩)。

何宗大學の教師らしい僧(四十年輩)。
大學教授の博士(六十以上)。
支那人(四十以上)。
學者らしき、教諭らしき、校長らしき紳士大勢。
男女の彌次馬大勢。

青葉になつた櫻の立木が見えるばかりで、廣々としてゐる。何でも此近邊に新古美術品卽賣會といふ展覽會がある。下手に公園附の茶屋が、ほんの軒先だけ見えて居てずつと往來へ突出して床几が二三脚、式の如く赤ゲットが掛けてある。座蒲團、煙草盆等。

一番端の床几に一人の老人、六十七八でもあらう、頭髮は眞白だが、餘り禿げもせず、若々としてゐる。服裝は前世紀も餘程遠いはう、端手な、赤い絲のまじつた棒縞の遊行振に獵虎の帽子、古風な大形の腰下げ煙草入、目立つて大きい珊瑚珠の緒締。今ちやうど古い軸物を卷いて箱に入れ、風呂敷に包んでゐるところ。美術品卽賣會の主席幹事である。

此幹事の老人が風呂敷を抱へて、茶店へ何か寄ぜりふを殘して起ちかける途端に、店の奥から唐突に又一人の老人が出る。

これも顧慮してゐるが、七十以上らしく、脊高く、色白く、頭の前は坊さんのやうに綺麗に禿げてゐる、髮と髭と頸元とに雪のやうな毛、白茱がゝつた無地の袴に無茱色の羽織、若い者のやうな歩き振。これも美術品卽賣會に何か緣故あるらしく、見るから何とか流行會顧問といふ風采、年は取つても時勢には後れんぞといふ自信が鼻の先にぶらさがつてゐる。尊大な口吻、聲は神經的である。時々鼻の先で乾いた聲で笑ふが、目では決して笑はない、笑つた後は殊に佛頂面をする。大抵肩を怒らし、懷手をしたまゝでゐる。假に顧問老人と名を附けておく。顧問老人だしぬけに出て來て

顧問　どうだね今日の景氣は？

幹事　や！（と言ふや否や驚きの表情を忽ち笑ひ顏に作り直してペコリとお辭儀をして）すてきです。一寸一昨日の三倍でげす。人間が氣短になつたんですから、何でも速いのが受けるんでげす。アハ、、、。

幹事老人は根つからなかしくないのに、鼻の上に皺を寄せて、時々如何にも愉快さうに笑ふ。一體腰の低い男である。笑ふ時は愛嬌のある無邪氣らしい表情をするが、忽ち生眞面目な、時には怖しく心配さうな顏附をして見せる。表情の變化が老練な俳優のやうである。

顧問老人はニコリともしないで

ともかくも同じ場所に新古の美術品を陳列して、實價卽賣仕り候といふのは思附だつたよ、禿頭も灰殼も一網だからねえ。ねえ君、（敵手の顏を覗くやうにして、ずつと聲を低くし）よしんば贋物にもしろさ、千年以前の美術品もあれば、つい此間パリスで產聲を揚げたばかりの何とか式といふ奴まであるなんざあ二十世紀式だからねえ。だが、迚も景氣程にや

賣れないだらう。

幹　（眞面目な表情をして）どうして面白いやうにはけますよ。（呆れた表情で）まるで翼が生えて飛ぶやうでげす。（そろ〳〵笑ひ顔になりかけて）米の値にやお關係なしですから妙なもんでげすよ。アハ、、、、、。

顧　（ニコリともしないで）明治の若造どもまでが、やつと借家離れをしはじめたからよ。（憎々しさうに）衣食足つて贅澤を知るンだ、流石の地方人めらも、何か粧飾が欲しくなりやがつたんだ。

幹　（反身になつて右手で後腦を抱へながら）貴下の口にかゝつちゃ叶はない。アハ、、、、。（急に眞面目な顔になつて）一件は、どう三萬圓で、西の宮が持つて行きましたよ。

顧　（冷然として）例の歌麿はどうしたね？

幹　あの肉筆の藤娘でげすか？（一寸心配さうに）ありや値が割に張つてますからね、まだ嫁入先が定りませんよ。（そろ〳〵笑ひ顔になりかけて）併し肉筆であんなのは絶品ですよ。彩色が少しも褪色しませんで、まるで昨日畫いたやうでさあ。全くの萬年孃でげす。

顧　アハ、、、、。北齋の鐘馗は？

幹　（又眞面目になつて）あれもまだ賣れませんや。好い出來ですがねえ。（心配さうに）つまり大き過ぎて用ひ處に困るんでげせう。

顧　とにかく此處の會は大成功だねえ。

幹　（へ笑ひ顔になつて）何事も招牌と廣告ですよ。アハ、、、、。柳下伯の名前が利いたんでげす、柳下伯主催といふのが。

顧　フ、、、（と鼻で笑つて）い、氣なもんだ。（憎々しさうに）柳下の會と來りや何時でも旨い物が攫まると思ひ込んでゐやがるところが、狡猾なやうでも流石に明

治ッぺいどもの與し易いところだね。へ、、。

幹　與しがたいのは天保度の古狸ですかな。ア、、、、。

顧　フ、、。

（佛頂面かして上手へ入る。幹事も入る。）

（鼻の先で笑つて、懶手のまゝ、上手へ歩き出す。幹事も續いて歩きながら引違へて上手から人の善ささうな五十五六の紳士、商人かとも見えるが、言葉づかひは學者かとも思はれる。禿げかゝつた胡麻鹽頭、八字髭は比較的立派なはう。流行後れの外套を着流しの上に著てゐる。少し先に立つて二十三四の青年、學生風、青瓢、學生としては帽子でもステッキでも生粋のハイカラ好み。元氣な口吻、胡麻鹽を「叔父さん」と呼ぶ。ステッキを揮つて下手へずん〳〵と行つてしまふ。叔父は如何したか停立して上手を詠めてゐる。行き過ぎた甥は戻つて來た。）

場　（じれったさうに）叔父さん！……叔父さん！（傍まで來て）何をさう珍しさうに見てるんです叔父さん？

叔　（猶上手を見たまゝで）感心してるんだよ。（頬を撫でながら）此體ぢやあ、もう三年と經たんうちに、予や明治の浦島になつちまひさうだ。

場　（無頓着に）なぜです？

叔　（向き直つて）どうも人間の顔がだね、見れば見る程次第に日本人離れがして來るやうだからさ。予とは沒交渉のやうな人相が多くなつたよ。今逢つた若い男なんざ純然たる西洋人だね。其癖雜種兒ぢやあない。

場　（ステッキで砂利をつゝきながら）おやゝ、叔父さんも大分老込ましたね、批評の口吻がそろ〳〵悲觀的になりするに古い日本人が過去つて、新しい日本人が增加したに過ぎないぢやありませんか？

叔　いかさま、それも一理だね。只如何にも喰べ附けないものが怖ろしく殖えたから驚くよ。引込んでゐたのは僅た四五年だのに、社會の樣子は飜然と變つてしまつた、名も解らんやうなもの

が多くつて方角が知れなくなつた、今日からちつとお前がたに教へて貰はんけりやならん。ハ、、、、。

bcから習ひなほしだ。

場　菱沼の伯父さんのやうに「あゝ、厭だ〳〵！」てなことを連發して、逃足になつちやいけませんよ。

叔　さあ、大分あぶなかしくなつて来たよ。ハ、、、、。……少し休まう。

叔父は奥の床几へ掛ける。場も掛ける。女、茶と櫻餅とを持つて出る。叔父は紙卷を吸ひながら、頻りに珍らしさうに方々を詠めてゐる。

何だい今日は？　頻に骨董らしいものを持つて往來するぢやあないか？

場　（櫻餅を摘みながら）そら、今通りましたらう、新古美術品卽賣會といふ會の前を、あの歸りでさあ。新聞で評判の歌麿と北齋の鐘馗は彼處にあるんですよ。あれだけでも御覽になりませんか？

叔　いや、予や骨董にや趣味が無いよ、あんまり。

此時上手から青年三人、A、B、C、其中Aは文學書生らしく、某大學の徽章の附いた帽子をかぶり、木綿飛白に小倉の袴、兩手で大事さうに奇妙な體裁の女の石膏像めいたものを捧げて先に立つ。他の二人BCは、若手の文學者らしく、二人とも洋服、Bは大分氣取つた裝、相應に大きな額面を二枚――夢二式現代美人の半身を畫いたのと一種不思議な渦卷畫しの手

法でエタイの分らぬ人形を畫いたのと二枚――まで小脇に抱へてゐる。最後のCは新刊小説らしいのを指に挾んで、二三間後れて歩いてゐたが、急におつゝいて極めて頓狂に

C　一寸々々。もう一度見せたまへ。

夢二式の額に手をかける。Bはあわてゝ顔をしかめて

B　あゝ〳〵、あぶない〳〵！（情ない低い聲で）君、破けるよ！

Bは徐かに夢二式の額をCに渡す。三人とも停立する。

C　（詠歎的に額に見入つて）えいなあ、何度見ても、理想的だねえ目が。（嬉しさうに）ねえ君、同じく憧憬の目でもねえ、こりや君、純日本式だからなあ！　ヒ、、、、。

如何にも嬉しさうに畫から目を離さずに笑ふ。

（如何にも柔和に、ゆるやかに、女性的な調子で）さうさ。（つく〳〵畫を詠めて）それから此肩ンとこの感じがいゝと思ふね。（間を置いて）所謂有るか無きかの肩だよ。（又間）單に是れだけで以て、東洋、殊に日本の女性が象徴し得られてると思ふねえ。

C　（突然Aに對つて）君々、君の其像もえいなあ、殆どロダン其者だねえ。ヒ、、、、。ロダン以上だよ實際。かうなると、實際ソノ何だなあ、模造と實物との間隔が審美學上の疑問になるねえ、曾て樗牛が論じたことがあつたがねえ、君。……

喋舌りながら三人とも行過きてしまふ。叔父は不審さうに見送つて

叔　何だか珍しさうな畫だなあ今のは？

場　（無頓着に）なあに、ありや平凡です。

叔　ありや日本の女の顔かい？

場　（不平さうに）えゝ〳〵。幾らもありますよ實際、あゝいふ女が。現代式といふんです。

叔　あゝ！　成程。お前なんぞが好くんだね、あゝいふのを？

場　（横をむいて）さういふ譯でもないんです。

叔　とろける樣なといふんだね。……（適當な評語を思ひ出さうとするかの如く）でれりとした……*Appetizing*……（念須を取りあげて）どうだ櫻餅は？　もつと食はんかい？

叔父は茶を注いでゐる。場は必要もなささうだのに、頻に靴を穿きなほしてゐる。

叔　（茶を飲みながら）あの眞黑に、ぐる〳〵とぬたくつたやうな畫は何だい、先刻の？

場　あれが最新の佛蘭西畫家の一派です。立方派の向うを張つて起つた渦卷派といふんです。曲線で以て終始するんです。英ちやヴォルテキストと譯します。

叔　（感心して）はてね。おつなものが流行るねえ。

此途端全くだしぬけに、下手奥の往來から一個のハイカラ美人が早足に出て來た。思ひ切つて現代的の親粧。夢二式そつくりといふ顔立、年は二十以上に相違ないといふ證據があれども、一寸見たところは十七八、日本服、羽織、襟卷、何れも最新の三越、マーガレットも念入の和製ハイカラ、舶來別仕立の濃厚づくり、日傘にオペラ嚢。どうしたか上氣して額前が亂れてゐる。直後につゞいて同年輩、同扮装といつたもの〳〵ずつと割引、二等券どこの類。前のがW、後のがX。Wは驅けて來て最ち端の床几へ掛けるや否「おゝ、あつい！」と言つて洒落れた絹ハンケチで顔の汗を拭く。Xも同じ床几へ掛ける。

W　（心配さうに）え、三村さん、どうしたのさ？

どうしたつて（と大きな聲をしかけたが、叔父と甥に目を附けて、少し聲を低くし）あたしほんとに困つちやつたわ！……

女が茶と櫻餅とを持つて來た。Wは話を中止した。女は店へ戻つた。Wは少し落着いた調子で、併し大げさに眉を顰めて

彼人はあんな見つともない裝をしてるでせう？迎も〳〵一緒に歩かれやしないから、先へ歸してしまはうと思つて（次第に調子高になる）大急ぎて上野行に乘つたのよ、あれから。すると（演劇的に落膽の表情をして）運わるく滿員なの！（歎息して）どうしようかと思つてると、前にゐた男の人が三人まで一緒に起つて、私を優待してくれたのはよかつたけれどね、女の人までが一緒になつて私の顔ばかし見てるんでせう。（同情を求めつゝ）あたし困つたわ！彼人を掛けさせる譯にはいかないし、さうかつて、すぐま

へにぶらさがつてゐるんですから、話でもしかけられて御覽なさい、すぐ母子といふことに勘づかれるでせう。（X頷に點頭いて同感の意を表する）あたしそれが辛くてたまらないから、わざと横のはうを向いてゐたけど、（眉を顰めて）あの通りの無神經ですから、つい何か言ひ出しさうにするのよ、どうしようかと思つたわ私、

X　（心から同感したやうに）絶體絶命ねえ！わたしお察し爲てよ。

W　それからどうしたの？

（歎息して）目で知らせやうかと思つても、みんなが穴のあくほど私の顔を見てるでせう、私困つちやつたの！爲方が無いからエヘン〳〵と言つて知らせたんですけれど、「え、なによを、なによを？」と尙と頓狂な聲して、摺寄つて來て、（眉を顰めて）とうど喋舌り出してしまつたのよ！お國言葉もお國言葉、正眞正銘掘立村の方言そつくらなんでせう！

X　（落膽の表情をして）しやうがないわねえ、まあ！

W　だから、（歎息して）みんなが私の顔を見ては阿母の顔、阿母の裝を見ては私の裝、私の顔を見ては阿母

の裝、阿母の顔を見ては私の……まるで、あのほら、玩具屋の店先にある首振人形……どうせう！……（泣聲になつて）一度に三十幾つといふ首振人形が出來たらうぢやありませんか、私の顔を的に！たまらないわ！私くわつとして、腦貧血が起りさうになつたから、夢中で電車から降りてしまつたの。

X　まあ！（と言つたが偶とWの顔を眺めて）あら眉墨が流れてるわ！

W　さう？（へと急いで懷へ手を入れながら）びつしより汗かいたもんだから……

（箱せこ　圖迫を出して顔面修復をはじめる。）

X　さうして阿母さんはどうして？

W　（顔をなほしながら）どうしたか……そこどころぢやなかつたわ……ほんとに私、どうしようかと思つたのよ。（懷中鏡と睨めくらをしながら）あんなのを母だと思はれて御覽なさい、折角の綺麗な、ロマンチックな空想がすつかり揉苦茶になつちまつて、生の歡びが三割がたも引去られてしまふぢやありませんか？あなたさう思はなくつて？

X　だつて阿母さんは、地理が分らないから、困る

でせう。見て來なくつてもいゝこと？

W　（冷然と）かまはないわ。　脊に腹は易へられないといふぢやなくつて？

これよりずつと前、甥の青年は、Wの顏を一目見るより狼狽へ出し、餓に叔父を促して出掛けようとする。で、叔父は、最初は何氣なく茶菓の代を拂はうとしたが、娘等の話が耳に入ると、段々インテレストを覺えたらしく、二人の女の顏を見比べて、容易に立上りさうにもしない。甥は氣を揉んで床几を離れ、「叔父さん、もう往きませう。」と度々急ぎりふで催促するが、出掛けない。で、如何にも困つたといふ顏をしてあちこち歩いてゐる。

娘二人は、話が途切れたと思ふと、どうした機會にかWがふつと青年と顏を合せた。

W　あら、御機嫌よう！

敏捷に床几を離れて、新しい女らしく活潑にやつて來て握手を求める。かうなると男性のはうは威嚴を失つて大まごつき、何だか口の中でムゲ〳〵とつぶやいてペコペコとお辭儀ばかりしてゐる。

此途端、Xは下手奥の方を見て

X　あら、三村さん！阿母さんがいらしつてよ！

W　（怖い目――夢二式には見たことのない――怖い目をして）叱！……

頓狂な聲をする。

青年は驚いて二足ほど退つた。Wは茶店に向つて

幾ら？

機敏なものである。嗤嗟に代を拂ふ、オペラ嚢を攫む、Xへ目まぜをする。忽ち上手へ消えてしまつた、但し青年へ挨拶もしないで。

叔父は呆氣に取られた顏。甥は衣嚢からハンケチを取出して頰に襟元を拭いてゐる。

同時に下手奥の方で、中國もよつぽどの山國らしい訛の老婆聲で

老婆　おういい！　おきくよう！　待つてくれ、待つて

くれ……

隨分と穢な扮裝の田舍婆さん、裾を高く端折つて、いかがはしい腰卷を出し、汗を拭き〳〵、喘ぎ〳〵早足に出る。

（息をきらしながら）ほんにやに親をほうつていぐ奴が何處にあるぞい？ おらは（苦しさうに立止つて）もそつとで死んにょつたぞえ。（上手へ向つて）此不幸者が！ こりや待たんけえ！（又追ひかける）待つてくれちふのに！（泣聲になりかけて喘ぎ〳〵）おらは、東京來て、こねえな酷い目に遇ふとは思はざつたぞよ。おゝい、お菊、待たんけえ、待てちふのに〳〵！

喘ぎ〳〵上手へ追つて入る。叔父は脇目もふらず感じいつて見送つてゐたが、思はず太い息をついて

現代的だなあ！（一寸甥を見返り）成程、先刻の畫は全く寫實だ！……

手を組んで感心してゐる。甥は横を向いて、手持無沙汰さうに、ステッキで小石を跳飛ばしてゐる。叔父は偶と上手を見て

おや〳〵、外國人がやつて來る。美術品卽賣會で何か大きな物を買込んだと見えて、人力で運んで來るわい。

上手から獨逸人らしい背の高い外國人、妻と見える肥つた婦人、つゞいて若い車夫が、人力車に、何か知らず角ばつた大きな物を白金巾で掩つて載せて、牽いて來る。通辯だか案内者だか、粗末な洋服を被た邦人が二人、敵手になつて何やら喋舌りながら來る。獨逸人は盛ん

に手眞似をして喋舌りながら下手奥へ斜に横切り、やがて一寸立止つて、又何か演說式に喋舌つてゐる。

此以前、甥は此一群を一寸見やつて

甥　（無頓着に）ありや平凡ですよ。昨日なんざ大八車三臺で運んださうです。

叔　何を買ふんだい？

甥　もう平々凡々な骨董品でもないといふんで、近頃は、樹木庭石附茶室そつくりだの、位牌、佛具、粧飾等一切附持佛堂だのといふ注文が多いさうです。地方ぢやあ本堂そつくりを賣つた寺が幾らもあると言ひます。

叔　今のは何だらう？

甥　多分華族か何かの古い墓碑でせう。

叔　（下手奥を見て）何か頻に喋舌つてるね。洋服が如何にも嬉しさうに聽いてるが何だい？

甥　つまり、何ですねえ、例の通り日本の美術思想を激賞してるんですねえ。要するに日本國其者が、古色蒼然たる一の神聖な、大きな古い美術品である、碎いていへば、無類な骨董品であり、巨大な玩具である、而してそれが、外國人一般が日本を世界のユニックな帝國として推重する唯

一若しくは第一の理由である、少くとも吾々は其意味に於て日本を尊重し愛好すると言つてゐるんです。

叔　何だあの騒ぎは！

此中西洋人の一群は行過ぎてしまふ。忽ち上手で騒しい人聲が聞える。

叔父も床几を離れた。

中學の校長らしい一學者、四十年輩、羽織袴、つゞいて何宗大學の教師らしい同じく四十年輩の僧侶、頭髪は大分のばして制帽をかぶつてゐるが、殊勝らしい僧服、學者は風呂敷包を、僧はポルトフオリオを携へて上手から出る。

校長　論語の正平版は欲しかつたですよ、復刻ですけれども。それからあの大石良雄の自筆！

僧　わたしはまたあの高麗燒の觀音さんが欲しうございました。

校　先刻の奈良佛は——あの塗金の——ありや怪しいですか？

僧　怪しいどころか、お話になりませんや。……

此時上手でウアー！といふ聞の聲が聞える。僧は上手を見て

やつて來た〳〵。まるで狂人だ。

校　（これも上手を眺めながら）併しあの孔夫子の像が吾々の手に入つたのは、獨り吾々の意を強うするに足るのみではないですよ、實に日本帝國の名譽でもあ

り、威力でもあるですよ。……あ、御覽なさい、支那人が泣いてます。

上手から「わつしよい〳〵！」といふ掛聲が段々近くなると、フロックコート、又は紋附の羽織袴、或はモーニング、イブニング、背廣、着流し、いろ〳〵の扮裝をした大勢の紳士、多くは大きな公私の學校に緣故あるらしく、概して眞面目くさつた立派な顏附である、それがどうしたか、大きな青銅製かとも見える孔子の像を、子供がお神輿を擔ぐやうに大勢で擔ぎ上げて、わつしよい〳〵と押して來る。あとからは男女の獨夫馬がぞろ〳〵、わや〳〵。其中に支那人が一人加はつて、人目も恥ぢず慟哭してゐる。

支那　私國、中華、大變自慢してゐました。けれども今、とうどう、革命あります。國、瓦解します。

（泣く）嗚兒々々！　私、國、道德の太陽、大聖人文宣王の銅像まで、今日、日本に買取られてしまひました。這不是國家要滅亡的兆頭麼、實在可悲之極。私、殘念で〳〵、しかたありません！

（又泣く）嗚兒々々！　私、國、物質的と精神的と、双つとも滅びてしまひます。（又泣く）嗚兒々々！

いつ誰れが持出したか茶店の床几が中央に出てゐる、とフロックコートの、大學の教授らしい一老博士、白い髮白い髭、シルクハットを掉りつゝ其上に突立つて演說口調で

博士　空間と時間とは無限でありますけれども、最も古き併しながら最も長く且つ廣く中外に施して悖らざる、最も健全な、最も現實的な道德の大本尊を專有してをりまするは、獨り大日本帝國

のみでありまする。……

皆々　ヒヤ〳〵！

博　吾々日本國民のみでありまする。……

皆　ヒヤ〳〵！

博　願はくは、日本帝國の爲に、此大道德の本尊を專有し得たことを祝して、萬歲を唱へませう。

皆　ヒヤ〳〵！

博　現實的大道德萬歲！萬歲！萬々歲！

皆　現實的大道德萬歲!! 萬歲!! 萬々歲!!

唱へ終つたかと思ふと、誰れがインピータスを與へたか知らず「わつしよい〳〵！」と一齊

に叫び出して再び銅像を擔ぎ出す。途端に上手奥で、例の大佛樣が鼻かんでゐるのかと思ふやうなブーブー！といふ殺風景な音がする、自動車の喇叭である。併しそれには一切かまはず、一同は狂氣のやうに

皆　わつしよい〳〵!!

叔父はふつと心附いて吃驚し

叔　あ、あぶない！自働車だ〳〵！

一同は委細かまはず

皆　わつしよい〳〵!!

甥の青年、其他二三人自動車に氣が附いて

三人　自働車だ〳〵!!

と叫ぶ。

皆　わつしよい〳〵!!!

ブーブーといふ殺風景な喇叭の聲。

舞臺がだん〳〵薄暗くなる。眞暗になる。幕が降りこめる。

皆　わつしよい〳〵!!!

突然ウアー!!といふ喧囂。騷がしい數百の足音。ブーブーといふ殺氣景な餘韻を殘して軋り去る一種異樣の車輪の響。

* * * * * * * * * * * * * *

本文の幕

時代　前の幕と同時。

場所　同　斷。

人物ではない化物

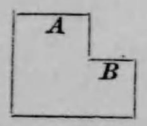
歌麿ゑがく極彩色の藤娘。

北齋ゑがく淡彩の鐘馗。

同　親鬼。

イントロダクションの幕が降りて、自動車騒ぎのどよみが全く消えてしまふと、何處ともなく遠く徐ろに三味線の音締が聞えて來る。それがだん〳〵耳近くなり。仇めいた調べになつたなと思ふうちに幕が上る。

新古美術品即賣會場にあてた圖の如き形に間取られた一室、ずつと奥になつてゐるAは一間半の床と床脇であり、Bは壁である。其他は總て襖で、自由に往來が



出來る。床の間には歌麿極彩色肉筆の藤娘（殆ど等身大）が古びた表裝をして掛けてある、非常な大幅なので、軸の地が床の上に溢れてゐる。其前を離れ、ずつと下手寄に古風な蒔繪の衣架、それに元祿好みの遊女の小袖が大小二枚掛けてある。それからBの壁一ぱいに、長押上から北齋筆の五月幟、淡彩で鍾馗と鬼二頭とを畫いたのが、見た目のよいやうに釣下げてある、目覺しい大きな幟である。すぐ其前ぐつと上手へ寄せて、古い鎧櫃。其他、上手下手、邪魔にならぬ所に種々の骨董（いづれも曲中に用あるやうなの）が並べてある。

幕の上つた當座は、室内一面に朦朧としてゐる。三絃の音につれて軸が動搖しはじめる。畫

が前へ靡いたなと見るうちに、極彩色の少女はちよろ〳〵と前の方へ走つて出た。

人目せき笠塗笠しやんと、
ふりかたげたる一枝は、
紫深き水道の水に、
染めて嬉しきゆかりの色の、
いとしと書いて藤の花。
エ、しよんがいな！
裾もほら〳〵しどけなく。

畫中の美人はとう〳〵活きた娘となつてしまつた。どこからか縮緬の手拭を取出して來て品なやる。

男ごゝろの憎いのは、

外の女子に神かけて、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

心やばせのかこちごと。

曲調が民謡式に一變した。少女は扇を飜し、輕い柔い曲線の波瀾を畫して媚態嫣樣なほしいまゝにする。所謂「潮來出島」の五曲である。

潮來出島の眞菰の中で、

あやめ咲くとはしほらしい。

一曲終はる毎に間奏がはさまる。それに伴ふ舞踊の手振が面白い。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

花を一本忘れて來たが、

あとで咲くやら咲かぬやら。

曲節がまた一變した。

松を植よなら有馬の里へ

植ゑさんせ、何時までも

變らぬ契りかいどりづまで、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

わしが小枕、お手枕。

娘が一たん退つたゞと思ふと、撥音がせわしくなつて

空も霞の夕照に、

名殘を惜み歸るかりがね。

と憧憬氣味に空を見上げた立姿になさまる途端に、四方が俄に眞暗になつてしまふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

大分明るくなつたと思ふと、室内の飾り附けの位置の少しく變つたのが目に附く。藤榻の軸は元鐘馗が掛つてゐたBの壁へ掛けられた。さうして鐘馗が床の間へ移された。鏡櫃も大分變つた處に据えてあつて、其上には緋縅の鎧兜が飾つてある。其他は別段の違ひもない。常盤津としては極めて莊嚴な一種の置淨瑠璃がはじまる。

夫れ妙莊嚴王本事品に
淨藏淨眼の御同胞、
菩薩所行の道成つて、
神通福德圓滿に、
大地を拔くこと七多羅樹、
虛空に浮んで行住し、
火焰を發ち、水を履み、
神變不思議を現ずとかや。
例をこゝに目ざましゝ！

此淨瑠璃の中頃から、一種物凄い非音樂的な物音が聞えはじめる。すると、畫中の鬼大小ともに鐘馗の手元、足元から拔け出して前の方へ走り出で「まんまと首尾よく拔け出したぞ」といふ思入をして二十五座式の仕草をなし、あちこちと跳廻る。

煩惱すなはち菩提なり。

此中物凄い音は段々激しくなる。鐘馗が眼を働かせはじめた。手足を動かしはじめた。

我れ執心の飜し、
大誓願の效あつて、

不退轉の利劍の光り……

物凄い音は彌〻はげしく、室内に鳴渡る。

凍れる月華と冷じく……

鐘馗喬然として床の間を躍つて前の方へ躍り出でたかと思ふと、大きな幅廣の劍を揮つて鬼共と激しい格闘をはじめた。

枯葉を拂ふ木枯の

悪鬼は亂れて逃げ惑ふ。

鬼ども敵しかれて上下へ逃げ入る。鐘馗は強ひても追はず、さもこそといふ思入をして、手近の鎧櫃へ立寄り、飾つてある鎧兜を押落して、櫃の上へ腰を掛ける。

曲調が一變する。鐘馗は疲れたと見えて、居眠をはじめる。

目に見ゆる

其山賊は破るとも、

見えぬ心のわるもの扮裝。

鬼ども上下よりそろり〳〵と窺ひ出る。有りあふ黒縮緬の古巾で頬冠りをして、鐘馗の後へ忍び寄る。

げに衞る人の隙間洩る

風に氣を置く忍び足。

先づ鐘馗の持つたる劍を奪つて隠し、互ひにうなづきあつて、鐘馗に催眠術をかけようといふ科介。次の小唄につれて、いろ〳〵仕草をしながら、鐘馗の周圍を廻る。次の唄は眠くなるやうな緩い節で唄ふ。

目からせうかの？　鼻からしよかの？　耳がよかろか？　口から兎角

地獄街道へ拔道が！

鐘馗ふいと大きな目を開く。鬼ども吃驚して飛び退く。

どつこい、あぶない！

おッかないない誘いて見たれば、

まんざらでもない顏附ぢや。

鐘馗またうと〳〵と眠りはじめる。大鬼大股に威張つて其傍へ詰寄る。

「何だ、金輪奈落心を動かさぬ。はてさゝ觀念が固定しちや困る。おい、それがそれ、コンベンションに囚はれてゐるといふものだ。

小鬼も同じやうに威張つて傍へ寄り

「だめだよ君。よしたまへ。

鐘馗次第に深い眠りに落ちる。鬼ども頻に暗示を與へる。

變るが天地天然の

原理なりやこそ昔から

諸行無常のお定まり。

神も佛もありやせぬ世には、

造化といふも、進化といふも、

のつぺらばうの出來心、

浮氣は情の自然主義、

本能主義の現代に、

さつても野暮な修三味。

浮世はたかが五十年、
百二十五として見ても、
つまりは一分、三分五厘。
ェ、、まけさんせ〳〵！
刹那々々が生ぢやもの！

此中段々暗示が利いて、鐘馗おびきだされ、鬼共と一緒になつて踊りはじめる。

曲調が俄に變つて、越後の角兵衛獅子を連想させるやうな鳴物になつたと思ふと、鬼共は遂立をやるやら、とんぼを切るやら、角兵衛獅子の眞似をして跳廻り、とゞ下手奥へ走り込んしまふ。

取殘された鐘馗は踊りくたびれて、尻餅をつき足を抛出し、固く目を塞いでゐたが、次の文句につれて次第に浮れはじめる。最初はじつと目をつぶつたまゝで踊つてゐる。

しばた五萬石は荒そとまゝよ、
新潟通ひがやめらりよか！
とかく悪性が浮世にや徳で、
寢まり地藏に色の願、
跣足參りの土ふまず。
家の嬶どの疳癪おさへて
夜間も晝間も三度栗。
さのせ〳〵！　さのせつせつせ！
せつたらきなこの稗團子！

搗いて欲し。

鐘馗が踊りくたびれて、倒れると、鬼共いつの間にか衣架に掛けてあつた元祿遊女の小袖を被て、面だけ美しい女に化けて、ひらり帽子か何かで角を隠して、しやならしやならと出て來て、また鐘馗を引張り出してなまめく。

骸骨が
上を粧うて花見とは、
出來ぬ奴めの負惜み、
われとわが身を小理窟で
縛つて春を垂れ籠めて
三日見ぬ間に櫻の花が
はんれ散りそろ、あつたら花が！

春が暮れそろ、あつたら春が！

くれそろ！

鬼共頻りに色仕掛で誘惑する。鐘馗しばらくは大デレにデレてしまつて、一緒に浮れて踊つてゐたが、ふつと我れに復つて

さてこそ惡鬼と勇猛力、
打揮り打揮る利劍の威德。
皆ずた〳〵に切放されて。
魔障の姿は消えにけり。

と、曲調の都合上、首尾よく鬼を退治することになつてはゐるが、此鐘馗どの〻手際では覺束ないものだと思ふうちに

幕

和歌の浦

管絃（尺八と箏とを併せ用ふる新式）にて幕明くと

平舞臺、奥は一面の海原。上手に遠く天の橋立を小さくしたるやうなる白沙青松。ずつと奥へ下げて大きなる巖、其前上手寄に振面白き磯馴松。舞臺附際其他あちこちに黄ばみそめたる蘆。夕陽のまだ殘りたる景色。

朗詠「俗に狎れて今に到りぬれども、霄を思ふ心常に存れり。

朗詠切れると、正面の大岩二つに割れて、長唄の合方につれて男女の兩ヅテを押出す。岩は直に元の通りになる。男は直衣、奴袴、立烏帽子、舞樂式の長き裾を拳き、檜扇を持つ。女は五つ衣、緋の袴、唐衣、裳、綴櫛など纏て式の通り、手には柏扇を持つ。

唄「染まぬ塵寰の色衣、ぬぎかへて秋を幾返り、わが世もわかの浦わたり。

ト本行やうの振ありてウタヒガヽリになる。

ウタヒ「面白や、ありし昔の蓬萊島をこゝぞとも、降りゐて翻す舞の袖。

トこれより舞樂模樣の管絃になり、尺八と箏とを使ひ、およそ五六分間舞樂の舞をつゞける。いつとなく長唄の合方に變はると

唄「住めば實に、都心も忘られて、つい移り氣な遠あさり。

ト次第に陽氣なる合方になり

「春日よし、月夜なつかし磯馴松も、沖を行くな

る白帆もよしや、あしに立つ涙はま千鳥、なにを騒ぐぞいたいけに、群れて來よ、遊ばん。

ト兩ジテ樂しげに舞ひ踊ることよろしく、トゞ向うへ思入「こちらへ來い」といふ科介ありて正面の岩陸へ退る。

トずつと碎けた賑かな幼稚い合方になり、それにつれて子カタ四人向うより走つて出る。いづれも漁家の子供といふ古風なる扮裝、年長の子供は釣竿、小さき方は手に魚籠を提げて出る。

子供男「あの舟見いだ、その舟見いだ。ほがいにそがいに、がいに取れた大漁、誰いが棄てた河豚、ひこずつてせゝくつて、無上に食うてごねた。出額ちやあ、ませちやあ、遊ばんかあ。

「やんちやどうしが連れ以て、騒り饒舌り磯遊び。

ト子供等本舞臺へ來る。下の唄につれて簡撲なる手踊。始終あげて來る大波にからかつてゐる心。「ホリヤ〳〵〳〵」にて高波が寄せて來たのを避け、揃つて逃げる科介。

「涙よ、どえらい涙、こゝまで來いだ。「うらが膝頭……ホリヤ〳〵〳〵……嘗めろやんれ。

「涙よ、どえらい涙。なじよ來ぬわんら。「ぐづ歟あほ涙……ホリヤ〳〵……逃げろやんれ。

此中以前の兩ジテ岩陸にて子供等の遊ぶのを面白さうに見てをり、我知らず釣込まれたといふ思入にて前へ進む、トタンに引拔くと、男女とも古風なる歌舞伎式の衣裳、男は行平、女は松風といつたやうな打扮になり、次の唄の間子供等と一しよになりて踊る。

「涙よ、づんづく涙、あほつた涙よ。ちんこゝち